
魔女と使い魔のバタバタな日々

ルナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と使い魔のバタバタな日々

【Zコード】

N7402L

【作者名】

ルナ

【あらすじ】

魔女・スピカ＝ルーンは、使い魔さがしのため、オークション会場へと足を運んだ。

その際に、使い魔候補の、綺麗な魂の持主を発見、彼を落札した。彼らの生活が今始まる。

魔女は真っ白な宝物を見つける

魔女・スピカ＝ルーンは、本人曰く、悪魔的な魔女である。本当は心優しく纖細だというのは、彼女の親友、

リイラ＝コルラッジだけが知っている。

スピカは急に使い魔を持ちたくなり、人身売買を行つて、オークション会場へとやつてきた。

壇上には、痩せた中年の男と、売り物らしき美しい少年がいた。背丈は小柄で、透き通つた青い瞳と、鮮やかな金髪が印象的だつた。不安そうにキヨロキヨロとあたりを見回し、金持ちらしき人々を見やつている。

スピカはじいつ、と少年を見た。きれいだ。見た目はもちろん、中身、魂さえも。

この子に決めた。スピカは本人曰くニヤリと、他の人の曰くにこりと、笑つた。

スピカは雪のような髪をツインテールにし、宝石のごとくきれいな紅い瞳をした、とてもかわいらしい魔女だつた。

が、本人がイメージする魔女との相違のため、

彼女は悪魔的というのを多少無理にでもつらぬこうとする。

本来動物などを主流とする使い魔に、人間を選択したのもそのせいだ。

スピカがぼうつとしている間に、オークションはすでに始まつていた。

「五千ヌフが出ました！ 他に入札の方はおられませんか！？」

「一万ヌフ」

まさに銀の鈴のような声がスピカの口からこぼれ出た。一瞬、会場がしん、となる。

少年がスピカの方を見た。スピカの紅い目と、少年の青い目がか

ちあつた。

彼の顔が、助けを求めるようにスピカを見つめる。

彼女はにっこりと笑うと、彼にだけ分かるように頷いて見せた。と、さつき五千で入札した男が一万、と言つた。

スピカが五万と言い、二人の小競り合いが始まる。

最終的に、スピカが百万オズでその少年を落札した。

ギヨツとしたように、競り合っていた男が静かになる。

この世界には、お金は四種類あり、銅貨がカトル、銀貨がサンク、金貨が

ヌフで、さらに上級金貨というものがあり、それがオズだつた。かなりの金持ちでも、そうそう持つているものではない。

これは彼女が幼いころから使わざためていた、全財産だつた。が、彼女にとって、お金にさほどの価値はない。

それよりも、本当に真っ白な清らかな魂の持主、この少年こそ、彼女には、

かなりの価値のあるものだつた。そのためならば、いくらだらうと構わなかつた。

見た目は綺麗でも、中身が真っ黒、もしくは少し汚れている、という人間はかなり多い。

私は運がよかつた、とスピカは思った。

ホツとしたように、少年がこちらに笑顔を向ける。

彼女は笑顔で少年に手を差し伸べ、少年は赤くなつて彼女の手を取つた。

魔女は真っ白な宝物を見つける（後書き）

なにぶん初めてなので、なにか不備がありましたら、
ぜひひい忠告をお願いします。

使い魔は主に恋をする

買われた少年は、名をアルト＝ハルメリアと名乗った。元は貴族の少年だったが、いきなり誘拐され、人身売買なげわいをする男に売られたのだといふ。

「あの、僕、何をすればいいんですか！？」

そういう少年・アルトに、スピカ＝ルーンはただ笑つた。少年曰く妖艶ようえんな感じに。かわいらしいのに、その顔は何故か良くなじ合つていた。

「なにもしなくていい。君が好きなことをすればいい」「好きな……こと……？」

「そう。私が君と築きたいのは、そんなつすつぺらい関係ではないから」

と、ぴたりと彼女は足を止めた。自分の住みかを見つけたからだ。木と土を使って魔法で立てられた館は、

井戸や畑や鶏小屋と共にそこに存在していた。館に入りかけたスピカは、少し考え、アルトの所へやつてきた。少年にしては少し白い手を取り、口づけする。

ギヨツとなり、顔を紅潮こうせきさせる彼の前で、手と足にはめられた鉄製の枷かせが破壊された。

満足そうに頷き、スピカは館に入つていく。

驚いたように目を見開いたまま、アルトも彼女に続いた。

「あなた、魔女なんですか？」

「そう。悪魔的な、ね」

アルトは青い目をきらきらと輝かせ、スピカは得意そうに言った。

が、次の彼の言葉に眉根を寄せた。

「そんなの嘘ですよ。あなたは、ちつとも悪魔的じゃない。だいたい、僕を助けてくれたじゃないですか」

「助けた訳じゃない。君が、貴重な存在だから買つただけだ。
使い魔にするために」

「使い魔？ なんです、それ？」

「魔女に仕える僕^{しもべ}のようなものだよ。」

君、私と契約をする？」

アルトはこくり、と頷いた。してもしなくても、行く場所がない以上、ここにいるしかない。ならばした方がいいと思えた。彼女がそれを望んでいるなら、そうした方がいい、と。

「契約をします」

「賢明だね」

スピカの可憐な顔がアルトに近づいてくる。訳が分からぬ彼に、彼女は説明もせぬまま、桜色の唇を彼の唇に重ねた。熟れた果物のように、アルトが赤面した。

と同時に、体中から力が溢れてきて、立つていられなくなり、その場に膝をつく。

「契約完了」

そういうつて微笑む彼女は、やはり悪魔的かもしれない。

アルトはそう思ったのだった。

使い魔となつたアルトの初仕事は、井戸から水を汲むことだった。
主^{マスター}が、風呂に入りたいと言つたのだ。

あまり力がないので、出来るか不安だつたが、それは杞憂だつた。契約をして力を得たからか、いともたやすく出来たのだ。水をたっぷりと満たした桶は、全然重くない。

羽か子猫^{マスター}でも持つているようだ。

「主、水を汲んできましたよ~」

「スピカでいい。次からはそう呼ぶように」

キッと睨まれ、アルトは肩をすくめた。はい、と返事をして下がろうとすると、スピカが平然と言つた。

「一緒に入るか、アルト？」

「はい！？」

アルトの顔が、これ以上ないほど紅くなつた。
夕日だつてこんなに紅くはないだろう。

アルトだつて年頃の男の子だつた。
いきなり一緒に風呂に入るか、と聞かれて、
紅くならない訳はない。

「そうか。入るか」

「入りませんよ！ や、やめてください、そういうこと書つたの。
ぼ、僕も男なんですよ！…」

「男が女と風呂に入るのに、何か問題でも？」

「あ、ありますよ！ とにかく駄目です！ 入りません！…」

からかつているのか、とスピカを睨むと、

彼女は何故怒つているのだろう、と不思議ふしきそうな顔をしていた。

アルトは相當に風変わりらしい、と幼い女主人に対する評価を
そう

くだし、そのまま浴室から逃げ出した。

アルトは彼女についてきて、契約したことを早くも後悔し始めて
いた。

彼女はいろいろなことに無頓着なのだった。

風呂からあがつたそのままの姿でうつらうつらしたり、研究に夢中に
なると

飲食を忘れたり、主人というよりは、
何故か動物の世話をしている気分
にアルトをさせた。

「す、スピカさあああん！… なんてカツコしてるんですかああ
ああああ！…」

「なんてカツコつて？ 私のロープ早く取つて
ああ

「早く着てくださいああああい！！」

田をやり場に困ったアルトは、慌てて白いローブを彼女に押し付けた。

首をかしげながら、スピカがそれをはおる。

白い髪をとかし、一一つに結い分けると、星の形をした髪飾りを二つ、髪に

飾つた。きらきらと、本当の星のよひこきらめいている。

「綺麗ですね、それ」

「リイラって誰ですか？」

「リイラ＝ゴルラッジ。私の親友。最近は来ないけど、いつも食事

の用意とかしてくれるんだ」

「最近つてどのくらい来てないんですか？」

「一週間くらいかな」

「一週間！？ その間、食事はどうじてるんですか！？」

「食べてない。面倒だし、私は作れないし」

アルトはギヨツとなつた。食事を食べていらない？

こんなに細くて折れてしまいそうな体つきなのに？

「駄目じゃないですか！！ 僕、すぐに何か作りますから、

ちゃんと食べてください……」

「まだ研究が終わつていなーー」

「研究より食事の方が大事ですっ」

あきらめたらしく、ようやくスピカは頷いた。簡単なスープとパンだけ

を作り、アルトはぱたぱたと働いた。

少し埃ほこりのたまつてゐる部屋を掃除し、

積んである洗濯物を洗い、ピカピカに床を磨き上げた。

と、当たり前のように「えられた食事を食べていたスピカが、あ、と小さくつぶやいた。

「どうかしました！？」

「リイラのよりおいしい……」

アルトは嬉しそうに笑つた。屋敷にいたころより、
ここの方が自分の居場所なのかもしれない。彼にはそう思えた。
スピカールーンの隣こそが。

使い魔は主に恋をやる（後書き）

やつと次話を投稿でもしました。これからどうぞどんどん増やしていくので、どうか見てください。

モノローグ ～主になつた説～

スピカ＝ルーンは、村の近くの森で一人、暮らしていた。
親友であるリイラ＝ゴルラッジしか来るのはおらず、
彼女は孤独な人生を生きてきた。依頼で薬や毒薬・惚れ薬を
作つたり、研究したり、人を殺す場合もあつた。

スピカは親友の言葉以外に耳を傾けることはなかつた。
村人が何を言おうと、また依頼先で中傷をなかうしょう
なげられようとも、無視を決め込んでいた。

そんな彼女が、使い魔を欲したのは、あいにくさみしかつた
からではない。リイラと、もう一人、仲良くしてくれる少女、
レティ－シャ・エルト・モランの忠告を受け入れたからだ。
愛称をレティといつ、このモラン王家の姫君は、スピカを
擁護ようごし続けるせいで、悪魔つきなどという悪評を
流されても、なかよくしてくれたのだ。

使い魔の話が出されたのは、三日前、リイラと共に城のお茶会
に招かれた時のことだった。

「ねえ、スピカ。スピカって、使い魔とか弟子とかいないの？」
亞麻色の髪に黒い瞳、美人というよりはかわいいタイプのレティは、
くりくりとした目でスピカを見ていた。
「物語とかじゃね～。いつも何か手下とかがいるんだよ」
「手下、ねえ」

好物のチョコレートケーキを頬ほりながら、スピカは肩をすくめ
た。

「興味がないよ。私は一人でいい。リイラもいるし
「かわいいこと行ってくれるわねーーー！」
そう言つた後、スピカはリイラにぎゅうつ、と抱きしめられてい
た。

不快ではないので、抵抗はしないでおく。

リイラは大人びた少女だった。ブルネットの髪を最新流行の形に編み上げ、オシャレなリボンをいつもつけている。

スピカのツインテールに飾つてある、綺麗な星の髪飾りは、彼女が選んで

贈つてくれたものだつた。趣味ではないが、彼女がくれたのでつけていた。

「でも、手下がないと、悪魔的な魔女じゃないよ！！」

ふうつと頬をふくらませ、幼い姫は反論した。変わり者でもある

彼女は、

スピカ同様、悪魔的な魔女に憧れている。

「あのねえ、別に悪魔的にこだわらなくても」

あきれ顔のリイラ。キッと一人が睨みつけた。

「リイラには分からんんだ！！ 私たちの気持ちが！！！」

「ごめん……私が悪かつたわ」

リイラは思わず謝つた。彼女たちが必要以上に悪魔的にこだわるのは、

見た目も影響しているのだ。レティはまだ八歳なのでこれから見た目も

変わらぬかもしれないが、スピカはこれ以上成長できない。

十五歳なのだが、十歳ぐらいの見た目と背をしているのだ。

それは、リイラのせいでもある。リイラが呼び出してしまつた悪魔と取引をし、魔女になつたせいでの成長が止まつたのだ。

「とにかく、私はやつぱり使い魔をつくる！ それも人間の」

「それこそ悪魔的だよ！－－ スピカ～！－－」

レティが抱きついてくる。きらきらと紅い目をきらめかせるスピカに、

リイラはあきらめたようにため息をついた。

モノローグ ～主になつた訳～（後書き）

前の話では何故使い魔を持とうとしたのかわからないので、ここです。理由を書いてみました。スピカの親友の二人組も出ます。初登場です。

少女は魔女を憎悪する

使い魔少年、アルト＝ハルメリアの朝は、^{マスター}主である、スピカ＝ルーンを起こすことから始まる。

スピカはひどく寝起きが悪い。部屋の戸を叩いても起きない。大声を出しても起きない。ゆすつても、薄目を開け、また寝てしまう。

そんな彼女を起こすことは不可能かと思われたが、彼には秘策があった。

朝早く起きて焼いた、まだほかほかのチョコレートの蒸しパンの皿を持っていくと、ぱちり、と彼女は覚醒した。

寝ぼけ眼が彼の眼を捕える。アルトは赤くなつた。かわいい。

「誰……？ あー、アルトか。おはよう、アルト」

「あつ！ ちょっと待ってください。そのまま起きたらあぶなーーー！」

少し高く作られた寝台から、スピカの体が落下した。ギョッとなるアルト。が、彼が受け止めようと近づく前に、スピカは謎の呪文を唱えて宙に浮いていた。

「私が魔女だつてこと、わすれていた？」

につこりと微笑まれ、アルトは脱力した。

草木染めの黒いローブに着替えたスピカは、もぐもぐと蒸しパンを頬ぼつていた。いつものツインテールに結われた白い髪には、やはり今日も星の髪飾りがきらめいていた。

「スピカさん、ちゃんとミルクも飲んでくださいよ！」

蒸しパンをのびにつまらせますよーー！ サラダもスープも残しちゃ駄目ですかねーー！」

アルトの声が飛ぶと、スピカはつづとつしつに眼をすがめた。

彼女はあまり指図されるのが好きではない。

「うるさい奴が一人増えた」

それでも、砂糖をたっぷり入れたミルクを飲み、ポテトサラダと野菜スープをたいらげた。目を見開き、味を楽しむ。

アルトは日々家事の腕の才能を開花させていた。

料理も昨日より上手くなっている。

少し汚れていた館も、つるつるピカピカに磨かれていて、起きぬけの

目にはすこし眩しい。たまっていた洗濯物が、ひらひらと外ではためいていた。

この子にしてよかつたかもしれない。

スピカは口には出さないものの、そう思い始めていた。

「今日出かけるから」

「はい？」

食事を終えた後、いきなりスピカはそう言った。
すっかり目が覚めたらしく、魔術で取り寄せた草の選別を開始している。

これは彼女の日課だった。薬を頼まれる依頼は多いので、お得意さんはいくつか用意するのだ。

「じりじりと草をすりつぶし始めたスピカに、アルトは驚いて聞いた。

スピカは聞こえなかつた?、と首をかしげた。

「き、聞こえます。聞こえてますけど、いきなりどうしたんですか？」

「何がありました?」

スッと白い手が差し出された。アルトの手も白いが、それ以上に、まるで

日の光など浴びたことがないような、病的な白さだった。

そこにはピンク色のかわいらしい封筒があった。

紙はかなり上等で、王家の紋がおしてある。

「レティがお茶会をするつて。リイラも行くらしいから、君もよかつたら、どう？」

「行きます！……あの、でも、それ、モラン王家の紋章です、よね？ レティってまさか……」

さすがに貴族の息子なので、紋章を見たことがあるのだろう。

こくり、とスピカは頷いた。

「そう。レティーシャ・エルト・モラン。モラン王家の姫」

言つた後で、あ、とスピカが叫んだ。

同時に、紅い目でじろりと睨んでくる。

薬草をすりつぶしすぎたらしく、緑色の液体と化していた。

「君が話かけるから」

「僕のせいなんですか！？」

怖い顔で睨まれ、アルトは泣きそうになつた。

あきらかに自業自得の結果なだが、スピカは責任転嫁していた。

舌打ちしつつ呪文を唱えて薬草を元の状態に戻す。

「元に戻せるんじゃないですか！」

「これは疲れるからあまりやりたくないんだ。なにより、また最初からやるのがめんどくさい。あーあ、君のせいだ

「ひどいですよ、その言い方！！」

「使い魔は黙つて」

カツとアルトが怒りで赤くなつた。

「使い魔にも人権いや、使い魔権をください！――

「何それ」

くつ、と魔女は笑みをこぼした。ムツとなりながらも、

あまりにかわいらしいのでアルトはうつむいた。

と、次の瞬間。

ドンドンドン！と口を叩く音がした。

「ちょっと！ 誰もいないの――！」

「リイラ」

スピカはすぐに戸を開けた。彼女の親友、リイラ＝ゴルラッジは、につこりと大人びた笑みであいさつした。

「ひさしぶりね、スピカ。今までこれなくてごめんね」

「ううん、いいよ。おばあさんは元気？」

「うん！ スピカの薬がよくきくのよー！ ……あ、この子が使い魔君？」

「アルト＝ハルメリアです」

ぺこり、ヒアルトは頭を下げた。リイラが自己紹介をする。

「リイラ＝ゴルラッジよ。スピカとはおさななじみなの。

よろしくね、アルト」

「あ、はい、こちらこそ」

こちらを見ていたハズのスピカの目が、何故か嫌そうにすがめられた。さつきまで「機嫌だったのに。

アルトはきょとん、となつた。

「スピカさん、どうしました？」

スピカはアルトとリイラの間に入ると、キッと彼女を睨んだ。

「リイラ。これは、私の使い魔だぞ」

私の、を強く強調しながらスピカは言つた。はたから見れば、嫉妬をしているように見える。

「別に、所有権を主張しなくても取らないわよ？
あ、ひょっとして、スピカ、ヤキモチ？」

「違う……」

ヤキモチと聞いてアルトはかなり期待したが、違う…と

呼ばれて落ち込んだ。そうだよね、違うよね、

とぶつぶつ呟きながら。

うつむいていたので、彼は気づいていなかつた。

魔女の耳が微かに赤く染まつているのに。

すっかり無口になつたスピカの、古びたほうきに飛び乗り、彼らは王都シユザリアへとやってきた。住民街をみると石

を投げられるというので、遠回りして商店街へと行く。

そこで魔女は機嫌を直した。

万人受けしがたいような、ぶきみなぬいぐるみや、奇妙な形の宝飾品を次々と見ていく。

「本当に趣味が悪いんだから」

リイラのグチを聞き流し、商品を一つ手に取つた、その時だつた。

「魔女、スピカ＝ルーン、覚悟つ！！」

凛とした少女の声と共に、いきなりの白刃が彼女を襲つた。

スピカがよけると、舌打ちと共にたくさんナイフが投げられる。魔女は全てをよけきり、さらに少女の手の中にあるナイフを全部たたき落とした。

魔女に抑えつけられ、少女はじたばたと暴れた。

「兄の敵！ 今こそ殺してやる！！」

スピカの力が緩んだ。そのすきを逃さず、上手く抜け出した少女は、エメラルドのはめられた高価そうな短剣を構え、憎々しげに叫んだ。

「絶対に許さないんだから！！」

「君の兄は、悪徳高利貸しで、多くのものに恨まれていた。だから殺しただけだ」

「確かに……」

少女は今にも泣きそうに顔をゆがめた。

「兄はあぐどーこともしていた！ でも、あたしには優しかった！ ！」

むしけらみたいに、殺されていい訳がなかつた！！」

スピカの体が小さく震えた。その顔が悲しみに染まつたのを、アルトは見逃さなかつた。が、それを上手く打ち消し、彼女は少女を睨む。

ギラリ、と紅い目が怪しく光つた。

「ならば、兄と同じ所へ送つてやる！」

「スピカ！！」

「駄目！！」

手のひらから雷の玉を取り出した彼女は、思いがけず大きな声で怒鳴られ、目を見開いた。彼女の名を呼んで、止めようとしていたリイラも同様である。

「これ以上、傷つかないでください。あなたは、人を殺すたびに自分も傷ついているのでしょうかー？」もう、やめてください」

スピカの顔が少女と同じになつた。底知れない悲しみが、彼女の心を支配していた。ふつ、と玉も消滅した。

「逃げましよう、スピカさん！！ リイラさん！！」

スピカの手を取り、アルトが駆け出した。リイラが後を追う。

少女は咆哮するように叫んだ。

「逃げるのか、卑怯者！！ あたしは、絶対にあきらめないからなー！」

スピカが初めて殺した相手は、自分の父と母だった。

悪魔と取引をした後、教会の神父とその妻は、娘を化け物よばわりし、殺そうとした。スピカは、恐怖した。今まで自分を愛してくれていた相手が、武器を持って襲いかかってきたのだ。スピカは頭が真っ白になり、本能が告げるまま両親を、変化させた爪で引き裂いた。

生きていた人間を、ただの肉塊に変えた。

気づいた時、スピカは血の海で倒れこんでいた。肉塊を胸に抱いたまま。変化してしまった紅い目で、リイラの姿を茫然として見ていた。

その後、彼女は一時期心をなくしたかのように、人を殺しまくっていたのだった。命乞いも、涙も、彼女の心を溶かすことはなかつた。

その中の一人が、あの少女の兄だった。

人は私を悪魔的というが、本当は違う。

私は夜叉なのだ。いきていてもしょうがないのだ。
そう思つていた彼女を救つたのは、

魔法の全てを教えてくれた師匠だつた。

スピカは人を殺すのをやめた。森に館を建て、
そこにひきこもつた。レティとリイラだけが、彼女を
恐怖の対象として見なかつたことから、二人と
仲良くなつた。が、人を殺さないということが
免罪符になる訳はない。憎しみは消えることはない。
もう、殺した相手は還つてなど来ないのだ。

少女は魔女を憎悪する（後書き）

途中からじりじり重い話になってしまいました。
次回はあまり重くならないように
気をつけたいと思います。

男は魔女に求婚する

使い魔少年アルト＝ハルメリアは、女主人とその親友と共に、お茶会の誘いを受けて城下町に来ていた。

いきなり命を狙われたため、三人で逃げてきたのでもうへとへとだつた。

「スピカさん、平気ですか？」

「ん、だい、じょう、ぶ」

あきらかに大丈夫ではなかつた。

彼女、スピカ＝ルーンの顔はひどく真っ青で、まるで病氣にでもなつたかのようだつた。

実は、彼女は人を殺したらしいのだ。

その敵を討ちに来たのが、スピカが殺した男の妹らしい。アルトには彼女の事情は分からなかつた。ただ分かるのは、スピカが人を殺したことで自身をも傷ついている、ということだけだつた。

「スピカ、もう今日は帰る？ どうする？」

彼女の親友、リイラ＝コルラッジがスピカに聞いた。

スピカは黙つて首を振り、かなり無理をして笑う。アルトは何か言いかけたが、ギラリと睨まれては黙るしかなかつた。

「行こう」

三人が歩き出した、その時だつた。

どん！と一人の男が彼女にぶつかってきた。スピカはバランスを崩しそうになり、リイラに支えられた。

「ぼけつとしてんじやねえよ！」

邪魔だ。邪魔！！

「そつちからぶつかつてきたんでしょう！？」

リイラが男を怒鳴りつけた。スピカは何も言わず、男を無言で睨むように見やる。

男と目が合い、男の顔がみるみるうちに赤く染まった。
「お譲ちゃん、かわいいな。そのかわいさに免じて許してやらないこともないぜ」

「そりやあどうも」

無愛想にスピカが言い返す。リイラはまだ腹を立てていて、何よ、偉そうに！と小声で毒づいた。

「名前はなんて言つんだ？　俺はエトワール・クロウ・リルアラ。リルアラ子爵だよ」

「スピカ＝ルーン……」

「スピカか……。お前、俺と結婚しないか？」

スピカが口を^オの形にしたまま固まつた。

リイラがいきなり何言つのよ！と怒鳴る。
そしてアルトは、むうつと頬を膨らませ、

男とスピカの間に割つて入つた。

「ちょっと！　僕の^{マスター}主をぐどくの、

やめていただけませんか！？」

男はムツとしたらしく、アルトの胸倉を掴み、いきなり殴りつけた。アルトが吹き飛び、その場に叩きつけられる。

「俺になれなれしく口をきいてんじゃねえよ、
使人ふぜいが！！」

カツとスピカの紅い目が怒りで燃え上がつた。

冷たく、しかし熱い炎が、彼女の中で渦巻いていた。

彼女の怒りに呼応するように、鋭い雷がスピカの周囲で鳴り続けていた。髪飾りとゴムが彼女の髪からはじけ飛び、
ぱさり、と白い髪が逆立つた。

「私の^モ所有物を殴つていいのは、私だけよ」

バキッ という鈍い音とともに、今度は男が殴られた。

端正な顔に小さなこぶしが綺麗にめりこみ、

男はかなり遠くまで飛ばされた。アルトたちが目を丸くしている。

スピカは何事もなかつたかのように、ゴムと髪飾りをつけ直し、

二人に目を移した。

「二人とも、行こう」

「あの、い、いいんですか、あの人……」

「どうでもいい」

その目にはまだ冷めぬ怒りがあり、二人は息を呑んだ。別に同情する理由もないし、スピカをこれ以上怒らせるのも怖いので、彼らは歩き出した。

十分ほど歩き、スピカたちはモラン城へとやつてきた。雪のように真っ白な、うつくしい建築物である。

衛兵は、三人を見るなり笑顔になり、姫様がお待ちです、と満面の笑みで言った。城の人間には、恐れられてはいないようだ。アルトは少しホッとした。

「よくいらっしゃいました！！」

城内に入ると、すぐにメイドがやってきて、彼女たちを案内してくれた。レティづきの腹心のメイドらしい。高価な造りの戸をたたき、中に入ると、幼い少女がいきなり抱きついてきた。

「スピカ～。会いたかったよ……」

「私も。レティ」

そこで、スピカはようやく本心からの笑みを向けた。

「この子がスピカの使い魔！？」

「そう」

レティは目をきらきらさせてアルトに質問を投げつけ、のべつもなしにペラペラとしゃべりまくり、アルトを閉口させた。メイドの少女が止める。

「姫、迷惑ですわよ」

「アカネは口うるさいの！！」

「姫のために言っているのです！！」

メイドの少女は、東洋人らしかった。珍しいまつすぐな黒髪はとても美しく、腰のあたりまで垂れ落ちていた。肌はどこか黄色みががつっている。

きれいな少女だった。

アカネといづらしき少女は、そつがないメイドだった。ときぱきとお茶の用意をし、すぐに下がる。

白いティーテーブルには、お茶を楽しむための準備がしつかりと並べられた。

バラの模様の陶器のティーセットに、銀製の三段のケーキスタン

ド。

マカロンの盛られた皿。ケーキの大皿。スタンドの上には、サンドウイッチ、スコーンやショートブレッド、ケーキがたくさん並べられていた。メイドが行つてしまつたので、変わりにアルトがリーフティーをカップに注いでいく。

良い香りが部屋中に立ち込めた。

今日のお茶は、甘めのミルクティーだった。

「何を取りますか、レティーシャさま」

アルトがトングを手にして言つと、レティは頬をふくらませて言い返した。

「レティって呼んでよ」

「え、駄目ですよ、姫様ですから」

「アルトはスピカの使い魔でしょう！？」

スピカはレティって呼んでるんだから、

アルトもレティって言わなきゃダメなの！？」

二人が言い合っている中、スピカたちは

すでに勝手にお茶会を開始していた。

スピカはチョコレートケーキ、リイラは

キュウリのサンドウイッチをチョイスして食べている。

「ああっ！－ 何一人だけで食べてるんですか、

スピカさん！－ リイラさん！－

「する～い！－ 二人とも！－」

「てゆーか、スピカさん食べるの早っ！－

小食なのに食べるの早っ！－

「早くしないとなくなるわよ」

どんどんとケーキやスイーツが無くなっていく。

アルトは睡然とし、レティは涙目になつた。

「スピカ、ちょっとは遠慮してよおつ！－ アカネ！－

ケーキとスイーツ追加！－

「了解です、姫」

彼らのお茶会は、結局お茶の時間を大幅に超えるまで続いた。

「レティ、また誘つてね」

リイラが笑顔で手を振つた。が、スピカはじいっとレティを見て
いる。

「どうしたの、スピカ？」

「レティ？ 言つておくが、これは私の使い魔だからね」

「どういうこと？」

訳がわからない様子のレティ。リイラがあきれ顔になつた。

「あんた、何八歳の子に嫉妬してるのよ」

「ヤキモチじやないつていつてるだろ！－

「どう見てもヤキモチよ！－

「全然ち・が・う！－」

ぎやあぎやあと言い合いながら一人はぼつぼつ飛び乗つた。

アルトもため息をつきつつ乗る。

着いてからも、二人はまだケンカしていた。

「じゃあ、私、帰るから。アルトと仲良くな
「しばらく来るなー！ リイラー！」

「言われなくても来ないわよ。アルトがいるしねー！」
「そこからはもう言語にもなつていなかつた。

わめきたてるスピカを置いて、リイラは帰つていく。

アルトも洗濯物の様子を見るため、一時彼女から離れた。

「あー。まだかわいてないな」

サクツと木の葉を踏む音に気付き、アルトは振り向いた。
そこにいたのは、昼間の、スピカにいきなり求婚した男だった。
「どうして、ここにいるんですー？」 まさか、僕たちのこと
つけていたんですか？」

アルトは鼻白み、男を睨みつけた。はつ、と男が鼻で笑う。
「そんな不遜なことするかよ。金があれば、スピカ＝ルーン
の居場所を吐く奴らなんて、数多くいるんでな」

「そっちの方が不遜ですよー！ スピカには近づかないで
くださいー！」 彼女は僕の主ですー！」

「安心しな。今用があるのは、お前だけだー！」

「あぐつー！」

再び殴られ、アルトは即席の物干し台に頭を強打した。

口が切れ、げほげほと血を吐く。

男は容赦なくアルトを蹴りつけた。彼が小さく悲鳴を上げる。

「調子にのつてんじゃねえぞー！ この下級貴族がー！
上級貴族の俺様によおー！」

ざあっと雨が降り出した。つめたい雨が二人に降り注ぐ。

アルトは洗濯物が、とこの場に場違いなことを考えたが、
今は動ける状態ではなかつた。

「私の所有物モノを殴つていいのは、
私だけつて言わなかつた？」

そこに、氷のよう冷たい声が飛んだ。

男は罰が悪かつたらしく、慌ててアルトから足を引ける。

だが、スピカの怒りはおさまらなかつた。

「私、バカと愚かなやつは嫌いなんだよね。

両方該当するお前は、殺してやる！！」

ザクッとこまいたちが男の足を切り裂いた。

否、生地が厚かつたため、服のみを切り裂いた。

「ひ、ひいつ……ゆ、許してくれ！！」

「だーめ。ぜつたいに、ゆるしてなんかあげない」

「スピカさん！ 駄目ッ！！」

アルトがスピカの足にしがみついた。さすがに彼を蹴り飛ばす訳にはいかず、スピカが止まる。

「なぜ、邪魔をする！」

「あんなやつのために、スピカさんが、きずつか、ないで……」

アルトはそのまま気を失つた。キッとスピカが男を睨む。

「アルトに感謝するんだな。見逃してやる」

スピカは男を置いて、抱き上げたアルトとともに館へと帰つて行つた。

一週間後。

「スピカ＝ルーン！！ この前はすまなかつた！！

謝る！！ そいつには優しくする！！

だから俺と結婚してくれー

「黙れ、下種が！！」

「ぐふあー！！」

スピカの館には、あの男の姿があつた。

彼女のパンチがヒットし、敷石に頭をぶつける。

どうやら、あきらめる気はないようだ。

アルトは思わず、殺すのを止めるんじやなかつた、と黒いことを考えてしまつのだつた。

男は魔女に求婚する（後書き）

別名、アルトにライバルを作るの巻きが完成しました。
彼にはまだまだ強くなつてほしいので、
こういう形で試練をしかけていきたいと思います。

魔女は再び狙われる

使い魔アルト＝ハルメリアは、今日は朝から機嫌が悪かった。

なぜなら。

「スピカ～。お前が好きだ～。

俺はお前を愛してる～」

とか変な節をつけて歌うバカ様（嘘、若様）がいるからだ。顔だけは無駄に美形な彼は、スピカに惚れたらしく、熱烈なアプローチを開始していて、

はつきり言つてスピカにもアルトにも大迷惑だった。

「麗しい顔をどうか見せておくれええええ～。

俺のスピカああああああ～」

「うるさい」

この館の女主人、スピカ＝ルーンの声とともに、大量の水流が男に振りかかつた。

がぼがぼと言いながらまだ歌おうとする、貴族の坊っちゃん、エトワール・クロウ・リルアラ。以外に一途なようだつた。きっと、彼がくどけば、OKする娘だつているだろうに。

「スピカさん、水は駄目です～！～

死んじやいますよお～！～」

「じゃあ、火で行く」

「火も駄目です～！～ 彼は人間ですか～！～」

「じゃあ、あいつを追い出して、アルト」

「苦手なんんですけどね、あの人」

アルトはしぶしぶながら彼に近づいた。

前回ボコボコされた記憶は、少年の中ではまだ記憶に新しい。

大丈夫、とスピカはにっこりと笑つた。

「君に何かあつたら、今度こそ殺しちゃうから」「殺しちゃ駄目ですってば！！」

完全に無視された男が、一人の気付かないところで死にかけていた。もう声さえも聞こえなかつた。

「スピカさん！！ あの人、死にかけてますっ！！」

「殺した方が私のため、君のため」

「スピカさん！！ そんなに迷惑だつたんですか！？」パチン、ヒスピカが指を鳴らした。水が引いていき、エトワールが解放される。げほげほ、と彼が水を吐いた。

「これにこりたら、家に帰れ、エトワール」

「スピカ。素直になれ！！ この嫌がらせさえも君の愛の
かたーー」

「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい。とつとと帰れ！！」
げしげしとエトワールを蹴りつけるスピカ。

が、エトワールは素直になれ、と言い続けていた。
とんでもなくポジティブシンキングな奴である。

アルトは思わず彼に同情した。

「バカ様～。リルアラ家の大バカさま～」

とその時だつた。からかうような声とともに、背の高い男性が森にやつてきたのだ。使用人のような服を着ているので、おそらくは、エトワールの家に仕えているのだろう。

「イリアス！！ バカ様はやめてくんない！ 若様だろ！？」

「うるさいです、バカ様」

「だから、バカ様じやねえつつの、クビにするぞお前」

「残念ですが、バカ様。俺が仕えるのは旦那様ですので。
あ、バカだから分かんないか」

「ふざけんな、このやろお！？」

「はあつ！！」

がすっとイリアスと呼ばれた男が、彼の鳩尾にごぶしを叩きつけた。

倒れ掛かってきたのを受け止め、ものすごい笑顔でもう一度殴っている。

「え、ちょっと！ 何してんですか！？」

「バカの口を封じました」

「一応主の息子ですよね！？」

「あー、大丈夫です。俺ら幼馴染なんで。……

うちのバカ様がお世話かけました」

「こいつ迷惑だから殺していい？」

「あー。駄目ですよ。こいつ、殺しても死はないんで。悪運だけは強いんですね。食事に毒盛つても、誰かがこぼしたり、

やつがたまたま食べなかつたりしますしね」

「殺意あり！？ 何があつたんですか、あなたたちの間に！？」

「……なにもないですよ？」

「今のはなんなんですか！！」

怖い会話を続ける彼らに、半泣きになつたアルトが割り込んだ。

「イリアスさんつていいましたね！！ 早くこの人連れてつて

ください！！ スピカさんが殺す前に！！」

「また来ますので、さよ～なら～」

もう二度と来ないで。アルトは心からそう思った。

彼らが帰つた後、アルトはいつものように彼女の食事を作った。

今日のメニューは、ガトーショコラとハーブティーだった。

ハーブティーの方は、庭に咲いていたハーブを使った、とてもおいしいものだった。

「スピカさん」

「何？」

ケーキを食べながら、スピカはアルトに目を移した。

「お願いがあるんですけど」

どこかあどけなさを感じる顔で、スピカは首をかしげた。

アルトのお願いとは、スピカの仕事の見学をすることだった。一度、見てみたいというのだ。

スピカは一瞬迷ったが、邪魔をしないなら、といいおいて頷いた。研究室として使っているところに、

アルトを招き入れる。そこは奇妙な匂いがした。

定期的に掃除はしているのか、あまり汚れてはいない。フラスコとビーカーが、いろいろな大きさでたくさんあり、どれにもさまざまな色の液体が満たしてあった。匂いの正体はこれなのだろう。

いろいろな色の水晶が、きらきらときらめいてきれいだった。

スピカは一言もなく、研究を開始した。

水色の液体を赤い液体に混ぜ、さらに緑の液体を入れる。ぼわん、と黒い気体が漂い始めた。

なんだかこげくさい。

「アルト、ふせて！」

「え、ええええええ！」

スピカに突き飛ばされ、倒れこむと、先ほどのビーカーが破裂し、轟音ともに壁が壊された。

彼女は慌ててそれを壁に叩きつけたのだ。

「だ、大丈夫、です、か？」

「大丈夫。直すから……我の召喚に応えよ……」

古よりの盟約により、出でよ、アルテミス……」

弓を構えた、男装の美しい少女がその場に現れた。

スピカはさらに言つ。

「この場を元の姿に……」

パアッと純白の光が飛び散った。壊れた壁が、しだいに直つていく。

が、それが完全に直つて少女が消えてしまつと、スピカはいきなり倒れた。ドサッと鈍い音が響く。

「スピカ、さん……？」

アルトはスピカを抱き上げた。体がひどく冷たい。アルトは焦つた。

「スピカさん……」

アルトはスピカを揺さぶつた。返事はない。目も開かない。

「どうしよう……おちつけ、おちつけ、とりあえず、ベッドに寝かせて、おちつけ……」

アルトは自分に言い聞かせると、迅速に行動した。

スピカを私室に運び込み、しばらく使われた形跡のないベッドに寝かせる。急いで村と城へ行き、リイラ＝コルラッジと、レティーシャ・エルト・モランを呼びに行つた。

二人はスピカを見て泣きそうになつたが、懸命に魔法書を調べ上げ、解決方法を見つけてくれた。

その方法とは、使い魔が、主に力を分けるということだった。契約する際、少し魔女の魔力が使い魔にも分け与えられているらしい。

手をかざすと、少しづつスピカの顔に精気が戻つてきた。半日以上そうしていると、ようやくスピカが目を開けた。

「バカバカバカ……心配したのよ……」

リイラは泣きながらスピカに抱きついた。

「わあーん、バカバカあ……」

レティも同じように抱きつぐ。スピカは罰が悪そうに、うつむいていた。

アルトもせいいっぱいの怖い顔をしている。

「心臓に悪いですから、気をつけてくださいね……」

「仲直りする前に、死んじゃつたらどうしようつて思つたじゃないの……」

アルトがいなかつたら、本当に死んじゃつたかもしけなかつたのよ……」

「「めん……三人とも」

スピカは一度と魔力をつかいはたすな、と一時間にわたってリイラに説教された。

だが、その代わり、彼女と仲直りすることができたのだった。

レティは勉強があるからと帰つたが、リイラは心配だからと次の仕事にもついてきた。

次の仕事は、場末の酒場の客引きとして、酒を飲むことだった。こここの国では、未成年禁酒法がないのだ。

アルトは一杯で目を回したけれど、スピカとリイラがすごかつた。飲むは飲むは。強い酒や甘い酒、そんなに強くない酒までやうに、かなり巨大なジョッキで二十杯は飲んでいた。

アルトはもう気持ち悪そうだった。

「よく、そんなに飲めますね」

「もつと飲めるよ」

「まだ足りないわねえ」

「ええええええええええ！」

「もう一軒行きましょうか？」

「もうかんべんしてくださいよ！！」

アルトが半泣きになつたが、一人は構わず別の店に行つてしまい、アルトは匂いだけで酔つて吐きそうになり、少し休むことになつた。

そして次の仕事に向かおうとした、その時だった。

「スピカああああああああ！！」

バカ様ことエトワール登場。

「こんなところで会うなんて、俺達うんぬー「スピカ＝

ルーン、死ねつ！！」い、ぎやああ！！」

何か言いかけたが、スピカへの復讐者の少女が飛び出して来て、鳩尾を蹴り飛ばしていった。

「ディオナ＝コーラルの名において、絶対にお前を殺してやる……兄、レヴァンの敵……！」

「……でやつと少女の名が明かされた。ディオナは小刀を構え、スピカに向かつてきた。スピカはよけない。

今にも泣きそうに、紅い目がゆがんだ。

ドスツという鈍い音が響いた。少女の小刀が、スピカの腕に突き刺さつたのだ。彼女の手が微かに震えた。

スピカが小刀を引き抜き、血が溢れる。

「よくも……！」

アルトがディオナに殴りかかった。ディオナは動かない。否、動けないのだろう。敵という大義名分で刺したが、彼女は人やいきものを害したことがないのだ。

アルトに突き飛ばされるように、彼女はへたり込んだ。

「よくも……！　スピカさんを……！」

アルトは本気で怒っていた。ディオナを殴りつけ、彼女の体は宙を舞つた。そのまま受け身を取れず、背中を打ちつける。さらにアルトは殴りつとした。

少女は抵抗ができず、目を閉じることもできない。

「アルト、やめなさい。私は大丈夫だから」

アルトは命令を無視しようとした。が、主の言葉の強制力で、動けなくなる。

「あ、あたし……あたし……」

動搖したように少女が呟いた。スピカが彼女に近づく。

「もう、終わりにしないか？　私が言うべきではないのかもしないけれど、復讐は復讐しか生まない。私が死んだら、アルトたちがあなたを殺すかもしない」

「あんたに、あんたに何がわかるのよ……！　私の苦しむも……！　悲しみも知らないじゃ ないか……！」

「うん、知らない。けど、知ろうとすることはできる」

ディオナの目が大きく見開かれた。一瞬、その目が迷つた。

だが、後ろの一人の姿を見て、彼女は迷いを捨てた。
否、捨てようとした。

彼女には仲間がいる。でも、自分には誰もいない。
その事実が少女の怒りに火をつけた。

「絶対に、絶対に、あんたのこと、あたし、許さないんだから……。
次は本当に殺してやるからッ……！」

ディオナは走り去つてしまい、スピカはうつむいていた。

その後、三人は薬を届けてからすぐに帰ることとなつた。
リイラと別れ、館へと戻る。

お風呂をすませると、スピカは寝ると言いだした。

「まだ暗くなつてませんよ？」

「いい。寝る」

「食事はどうします？」

「いらない」

スピカの部屋から出て、アルトは家事をするために歩きだした。

スピカが館へと帰つたその頃、ディオナは、スピカがいるのとは
別の森で、古い小屋に帰つていた。

「あたし、どうしたらしいの。教えて、兄さん。
レヴァン兄さん。兄さん！！」

寄る辺のない少女は、ただ一人、すすり泣くのであつた。

唯一の肉親だつた、兄の名を呴きながら。

少女だつてわかつっていた。敵である魔女を殺しても、兄がもう一度と
度と

戻つて来ないということを。だが、どうしても恨みは消えなかつた。
悲しむも。痛みも。ぶつける相手は、魔女しかいなかつたのだ。
魔女が後悔をしているとしても。もうもどることはできなかつた。

スピカは夢を見ていた。殺した人間が、彼女を逆に殺そうとする
という、悪夢だ。夢の中で、彼女は引き裂かれ、突き刺され、火を
つけられ、

命乞いをしてもそれは許されなかつた。

全ては、彼女が殺した者たちにやつたことだつた。
繰り返される殺戮。死ぬことさえも許されない。
たすけて、と彼女は呟いた。もうゆるして、と。
それでもそれは止まることなく続く。

その時だつた。

?スピカさん、大丈夫ですか！！スピカさん！！？
声とともに、空中から白い手が伸びてきたのだ。
スピカはその手を取つた。同時に、目を覚ました。
気づくと、アルトが手をにぎついてくれていた。

「アルト……」

「どうかしましたか？」

「怖い夢をみたの」

「大丈夫ですよ。僕がついてますから」

「アルト、私、人を殺したの。依頼されるままに。
何人も。むしけらのように」

アルトは一瞬驚いたような顔になつたが、すぐに頷いた。

「そんな私でも、生きるケンリツて、あるのかな。
私は、あの子になにをしてあげればいいんだろう」「
何も、しなくていいと思います。仮に、あつたと
しても、それはあの子が考えるべきですから」

「そう……。アルト、こんな私でも、

一緒にいてくれる？ 最後まで……」

「もちろんですよ。話してくださいって、ありがとうございます。……もう、眠つたほうがいいですよ。
僕がずっと手をにぎつてますから」

「ありがとう……」

やつと、スペカは安心したように眠った。

魔女は再び狙われる（後書き）

スピカがだんだん幼くなつてきました。最初はもう少し大人っぽかつたのに。

それに反比例し、アルトが大人っぽくなつてきたので、この二人はこれで

いいのかなあとも思います

番外編 ～使い魔が魔女に会つた説～

アルト＝ハルメリアは、貧乏貴族の末っ子として生を受けた。三人兄弟の中でも、勉強は一番できて、そのせいによくいじめられた。

親に言えばもっとひどいいじめが待つてるので、アルトには耐えるしかなかつた。

アルトが逆らわないので、兄たちのいじめはだんだんエスカレートし、暗い物置に閉じ込められたり、家から追い出して鍵をかけ、入れないようにしたり、犬をけしかけてけがをさせようとしたこともあつた。この時は、アルトが上手く逃げられたので、けがはしなかつたけれど。

「おにいさまたち、なんでぼくをいじめるの？」

当時五歳だった幼いアルトが、泣きながら言つと、兄二人は意地悪そうに口元をゆがめ、お前が嫌いだからだよ、と言い返した。

幼いなりに聰明だったアルトは、その一言でひどく傷ついた。そして、五年間にいたるまで一度も抵抗はしなかつたし、両親にいいつけることはなかつた。

が、十歳になりたての頃、アルトが兄たちに反抗するという事件がおこつた。

アルトは兄たちにうとまれていたので、メイドたちもあまり彼に構う事がなかつた。

会釈やあいさつはするが、それだけなのだ。

それでも、まったく話をしない者ばかりではなかつた。

まだ八歳のメイド見習いの少女だけは、アルトに仲良く

してくれたのだった。

名前はアネット。アネット=ベル。

風変わりな少女らしく、他のメイドたちからはまばじきにされているらしかった。

肌がやけに白すぎるせいからか、白い髪に紅い目といつ取り合わせからか、神秘的な印象がした。

紅い目はこの辺ではあまりない。

白い髪をポニーテールにした彼女は、いつも桃色の花の髪飾りをつけていて、とてもよく目立つた。

アネットは無邪氣で活発な娘だった。体が弱いのだが、そうは見えないほどに明るかった。

「あたしね、教会の娘なのよ」

つたない声で彼女はアルトに、いろいろなことを教えてくれた。優しい姉のこと、厳格な父と母のこと。

姉の親友で、もう一人のお姉さんのように接してくれた少女のこと。

「この髪飾り。お姉ちゃんのおともだちがくれたんだよ。東方の国のおはなんだつて。たしか、モモつていうの。かわいいでしょ」

「うん、かわいいね。アネットに良く似合つてるよ」

「ありがとう、アルト」

アルトは友達ができてうれしかった。初めての、友達だった。

彼女のしゃべり方は、情感たっぷりで、とても楽しそうに話すので、アルトもつられて笑顔になつてしまつた。

「アナマリアお姉ちゃんはね、とっても頭がいいの。あたしに、いろいろなことおしえてくれたんだよ。まどうしょのこととか、つかいまのこととかね~。お母さんたちにはないしょねって言つてたけどね。お母さんたち、そういうの嫌いなんだって」「へえ、なんだ」

アルトはこうこうとき相槌を打つことしかできない。

元々、人と話すのは得意ではないのだ。

あまりいことは言えないアルトに、アネットはつまらない、と投げ出すことをしなかった。

無邪気な声で、いろいろなことを毎日話した。

だが、幸せは長くは続かなかつた。

兄たちは、メイドたちからアネットについての報告を受け、彼女に嫌がらせを始めたのだ。アネットの病氣に効く薬を隠したり、わざとぶつかつたり転ばしたり、拳句の果てには、アネットに薬を売らぬよう、街の薬屋全部に圧力をかけたのだった。アネットはだんだん体を悪くしていき、咳を繰り返すようになつていつた。

アルトには知られないように、空元氣でも笑顔を通したので、アルトは全く気付かなかつた。

兄たちは、アルトに近づくのをやめないアネットに、しだいにいらだちを募らせていつた。直接アルトに会うな、と言いにも言つたが、この時ばかりは、彼女は強い感情をむき出しにした。「あなたたちなんかに、あたしはしたがつたりしない！」まちがつてるのは、あなたたちのほう！！

アルトは、ちつともわるくなんかない！！

まだ小さい子に真実をつかれた兄たちは、カツとなつて彼女を倉庫に押し込めた。誰もほとんど立ち入らない場所だった。けほけほ、と苦しそうな咳が響く。アネットの紅い目には涙がにじんでいたが、兄たちはただ笑うだけだった。

アルトに近づかなきや出してやる、と言つた。

アネットは首を振つた。

「あなたたちなんかだいきらい！！ アルトはしあわせにならなきやいけないの。

あんないい子なんだもの。あたしなんかと、なかよしくしてくれたんだもの！！」

咳まじりの声でアンネットは叫んだ。顔がひどく青い。

彼女はもはや、氣力だけで立つてしまっていた。

アンネットが熱が出て、くらりとなつた、その時だった。

「何をしているんですか、あなた方！？」

響いたのはアルトの声だった。氣絶したアンネットを抱きとめ、アルトは敢然と兄たちに立ち向かい、彼らを打ち負かした。アルトを恐れたからか、単に罰が悪かつたからか、この田から、兄たちの

いじめはなくなつた。が、アンネットもいなくなることになつた。メイド見習いを、自らやめた、というのだ。

「あたし、お家にかえらなきやならないの。これ、読んでね」

彼女は薄桃色の封筒をアルトにくれた。その真ん中には、モモの髪飾り

を模した印章が押してあった。

「どうしても行つてしまふの？」

「うん……」

最後くらいには、家族のもとで死にたいから。その言葉を、アンネットが

口にすることはなかつた。言つたら、死ぬのが怖くなりそうで。

アンネットは自分の死期を悟つていた。その後、薬を長い事飲んでいなかつた

ので、すぐに飲んでも、体は少しもよくならなかつたのだ。

「いつしゅうかんだよ。いつしゅうかんしたら読んでね」

そう言い残し、アンネットは汽車に乗つて行つてしまつた。

一週間後。手紙を開けたアルトは、文面を見てギョッとなつた。手紙には、こう書かれていたのだ。

アルトがこのてがみをひらぐ「お、あたしはもうこのよこはないの。」「めんね、アルト。あたし、いつしゅうかん」にしぬのがわかつてたの。でも、アルトにはいえなかつた。いつのがこわかつたの。しないで、つていわれることがこわかつたの。だつて、しぬことは、もうかえられないから。

あたしね、ほんとうはいえでだつたの。ほんでよんぐ、メイドをやつてみたくてね、おかあさんたちにだめだつていわれちゃつてね、いえをでたの。どうしてもやりたかつたから。

アルト、アルトも、じぶんにしようじきにいきなきやだめだよ。やりたいことがあつたら、いえをでたつてやりとげなきやだめだよ。あたしはもういなけれど、ずっと、空の高ことこのでアルトをみまもつてゐるから。さよなら。

アナネット＝ベル

アルトは泣きながら手紙を読んでいた。そして、両親と兄弟に自分のやりたいことを伝えた。

アルトはどこかへ奉公したかつたのだ。

家事はすこしずつ練習していだし、料理の腕も悪くはなかつた。だが、貴族だといふことを重んじていた両親は、アルトの言葉をはねのけた。アルトはもう一度アナネットの手紙を読み、手紙と身の回りの物とお金を少しだけ持つて、家を出た。

アナネットと同じように汽車に乗り、旅に出た。

その選択が正しかつたのかは、その時はわからなかつた。アルトは寝過してしまい、お金を汽車ですべてつかいはたし、拳句の果てに、降りた街で人攫いにあつたのだから。

その後、アルトは五年間にわたり、オークション会場を転々とすることになつた。上玉だからと、なかなか売られな

かつたのだ。そして、ようやく売られる」とになった運命の日に、彼女と会つたのだった。

スピカ＝ルーンに会つた時、アルトの心臓が跳ね上がつた。初めて会つたのは、人身売買のオークションだった。本当に、アネット＝ベルの髪の色と目と、彼女はとても良く似ていたのだ。そのことをのぞいても、とてもかわいらしい少女だつた。

きれいな目で自分を見て、鈴のような声で名前を呼ばれ、アルトはそんな彼女に恋をした。

悪魔的というイメージを貫きたいらしいが、とても心やさしく、はかなげな少女に。自分を買い受けて助けてくれた、幼い女主人に。アルトは今では、選択はまちがいではなかつたところから思えるのだった。

番外編 ～使い魔が魔女に会った訳～（後書き）

アルトの幼いころの話です。キャラのことがよくわかるので、またたびたびこういふのは書きたいと思います。

魔女は恋心を自覚する

すべてのはじまりは、スピカ＝ルーンの一言だった。

「アルト、ケーキ買ってきて

「はい！？」

朝起きて、白い髪を腰まで垂らした姿で、手紙のチェックをしていた彼女は、使い魔のアルト＝ハルメリアに、唐突に言った。

「ケーキなら僕が作りますけど、

それじゃ駄目なんですか？」

「レティが、新しいケーキ屋が出来たって言つてたから、食べてみたいの」

「わかりました。家事を終えてから行つてきますね。いくつ買いますか？」

「全種類一個ずつお願ひ。自分の分も買つていいから

アルトは苦笑した。この少女は、小食なくせに、甘いものだけは人一倍食べるのだ。

アルトが洗濯し、掃除し、料理をしている間に、スピカは雪のよだな髪を結い、きらきらした星の髪飾りをつけていた。今日のローブは、桜色のかわいらしい色だった。

スピカは染色と裁縫が得意なので、

自分の服はすべて彼女の手作りだった。

「かわいいですね、その服。似合つてますよ

「……！？」

スピカの星のよだにきらめく紅い目が、大きく見開かれた。かわいらしい口が〇の形に開いている。

驚いた時の、彼女の癖だ。

耳が赤くなる前に、ぱつと彼女はアルトから目をそらしてしまつ

た。

「早く行つてきて」

「わかつてますよ、今行きます」

「冷たく言われ、首をかしげながら、アルトは館を飛び出した。

「かわいいつて。にあつてるつて」

アルトが館から消えると、魔女は一人、赤くなりながら口元を緩ませた。

アルトは王都シユザリアで迷つていた。スピカから、地図をもらひ忘れたのだ。

彼女から受け取つた十カトル（銅貨）で馬車に乗り、やつてきたのはいいが、

ケーキ屋の場所が分からなかつた。

街の人に話しかけても、冷たい声で、今忙しいんだ、と返される。

どうしようともつた、その時だつた。

「どうしたの、そこの子、迷つた？」

黄色い髪を後ろでひとつに結つた女性が、優しく話しかけてくれた。

同じ色の目が、好奇心にキラキラ輝いている。

「君さー。人形の魔女・スピカ＝ルーンの、使い魔でしちゃう？」

「な、なんで知つているんですか！？」

「君がいたオークションはねえ、知らぬものはいないとされんぐらい、

有名なんだよ。落札品とかも新聞に載るしね

「だから、みんな僕をさけるんですか？」

「それもあると思うよ。スピカ＝ルーンは恐れられているからね」

キッとアルトは女性を睨みつけた。

にこにこと笑つている彼女の考えていることが読めない。

「あなたも、ですか？」

「冗談でしよう？ なら君に話しかける訳ないじゃないの。

私は、殺しを依頼したくせに、後から手のひらを裏返すようなバカは嫌いだからね。スピカ＝ルーンを恐れてなんかいないよ」

ほつとしたように、アルトは息をついた。

「何か探してるので、君？」

「アルト＝ハルメリアです。君君のやめてください」

「アルトね。私はメリッサ＝ウォーカー。『占いカフ＝

・カツサンドラ』って知ってる？ その店主」

「カツサンドラの！？ 僕が探してるの、そこですよ！！」

偶然だね、とメリッサが笑う。アルトは運よく、探していた

店の店主にめぐりあつたのだった。

メリッサ＝ウォーカーは、既婚者だった。

白い指の薬指に、結婚指輪がはめられている。

銀色のリングには、ラピスラズリが飾られていて、ひいらぎの模様が彫つてあつた。

「結婚、してるんですね」

「そ。人妻だよう。彼は細工師でね、この指輪も彼が作ってくれたんだよ。きれいでしょ？」

「旦那さんが作ってくれたんですねか、いいですね」

「うん……あ、ついたよ」

一瞬悲しそうな目になつたが、つぎの瞬間にはもうメリッサは笑顔に戻つていた。

『占いカフ＝・カツサンドラ』は、エキゾチックな雰囲気だった。ふしきな文様のタペストリーが飾られ、きれいなカードや水晶が置いてある。

「で、ご注文は？」

「えーと、全種類一個ずつください」

「一個100カトルだから、2000カトルだねえ」

「えーと、あと、もうひとつください。このカードのやつ」「まいどあり」

2000と100カトル払い、アルトはケーキを受け取った。
一礼して店を出ようとすると、ちょっと待つて、と呼び止められた。

「占つてあげるから待つてよ。そこ、座つて」

アルトはメリッサの前の椅子に座つた。

真剣な顔をした彼女が、タロットと呼んだカードを慎重に切つていいく。

スプレッドはヘキサグラムにするね、とメリッサは言った。

七枚のカードを星の形に並べていく。

「最初は過去、力の正位置。勇気、危険を伴つ判断、独立心。
君さ、もしかして家出した？」

「えつ！？ なんでわかつたんですか？」

アルトは出されたミルクティーでせきこんだ。

「なんとなく結果で占つただけだよ。次は現在、世界の正位置。
ふうん、君の目的は達成されたね」

「はい、当たつてます！！」

「次は未来、運命の輪の正位置。幸運の始まり、良い方向への進展。
君の未来は明るいよ。次は対応、恋人の正位置。愛の強さ、直感を
信じる。

うーん、愛を疑うなつてことかな」

かあつとアルトが赤面した。ガシャン、とお茶をこぼしてしまつ。
それには構わぬ、メリッサは続けた。

「次は環境、つと。審判の逆位置。不満、見当違い。
君は今の状況に満足してないね。当たつてる？」

「……当たつてます」

アルトはテーブルを拭く手を止め、うつむいた。

「次は願望だね。星の正位置。明るい未来。恋愛の成就。
好きな人と結ばれたいんだねえ」

椅子にすわる「とした彼は、がしゃんと動搖のあまり、すつ転んだ。

椅子が倒れ、膝をすりむく。

笑いたいのをこらえ、メリッサは真剣な顔を通していった。

「最終予想。これで最後だよ。死神の逆位置」

「し、死神！？」

アルトがさつとあおざめた。

「大丈夫。逆だから意味も逆だよ。好転する、変化。……これから顧みるに、愛を疑わなければ、君の目的は果たされると思つよ。おつかれさま」

「ありがとうございました」

「いつでも占うからまたおいでね～」

アルトはメリッサに頭を下げ、嬉しそうな様子で帰つて行つた。

「お帰り、アルト！！」

館に帰ると、スピカが飛び出してきた。思わずケーキの入つた箱を落としそうになり、彼は慌てて持ち直す。

「今帰りました、スピカさん。これ、ケーキです」

早速スピカは箱を開けた。

ショートケーキ、ガトーショコラにモンブラン、エクレア、シュークリーム、ティラミス、スマモのタルト、ブラウニー、ミルフィーユ、トルテ、スフレ、チーズケーキ、プリン、スコーン、マカロン、マフィン、アップルパイ、シャルロット、コケモモのタルト、キイチゴパイ

などが、次々にかわいらしい口に消えていくのは、圧巻だった。

アルトは粉砂糖をたっぷりとかけたガトーショコラの前で、動きを止めている。

「アルト、お茶淹れて」

スピカがそういう頃には、ミルフィーユにさしかかったところだ

つた。

かなり食べるのが早い。味がわかっているのか、と聞きたいくらいだ。

が、スピカの皿はきらきらときらめいており、頬も紅潮していたから、

かなりおいしいのは確かだつた。

ハーブティーを淹れ、一人分にカップに注ぎ終えたアルトは、自分の

ケーキを一口食べてみた。

「お、おいしい……」

アルトは落ち込んだ。かなり落ち込んだ。何故つて、自分の作るものより、

はるかにおいしいのだから（店出してるから当たり前）。

あの人には弟子入りしよう……！ アルトはそう決意した。すべてはスピカのために。愛する彼女のためだつた。

次の日、スピカは買い物に行くから一緒に来ないか、と聞いてきたが、

アルトは行くところがあるからと断つた。

スピカが悲しそうな顔をしたことに、彼は一切気付かなかつた。

アルトはすぐに馬車に乗り、昨日のカフェにやつてきた。

「メリッサさん……！」

「え、と、君は昨日の……」

「アルトです……！ 僕を弟子にしてください……！」

「ダメ……」

「だ、駄目なんですか……！」

「私は弟子は取らないの。……でも、君が通つて、勝手に

私の技を盗むのは止めないけどね

「ありがとうございます……！」

「ありがとうございます……！」

それから、アルトは足しげくここに通つた。スピカの誘いは、幾度となく断られた。アルトとしても辛かつたが、彼女の喜ぶ顔を見たいといつ一心で耐えた。

スピカは苛立ちをつのらせていた。アルトが、少し前はどこでもついてきていたアルトが、ここ最近、毎日出かけるからと、誘いを断り続けるからだ。

王都シユザリアの市場で、「凶悪魔君人形（限定品・1500カトル）」を購入し、カフェによろひと立ち寄つた彼女は、そこに使い魔の姿を見つけた。

「アル……」

声をかけようとした彼女は、そこで立ち止つた。

アルトが、自分以外の（レティ・リイラをのぞく）女性と、楽しく話している。

女性が何事か言い、アルトが赤くなつた。

泣きそうになり、スピカはぬいぐるみを抱いたまま、館に逃げ帰つた。

アルトの名誉のために言つておくと、彼はもうろん、メリッサが好きではなかつた。好きは好きだが、愛してはいない。既婚者だし。あくまで友人として好きなのだ。

赤くなつたのだけ、彼女に、「告白しちゃえば?」、「や、やめてくださいよ、

いきなり言つの……」とからかわれたからだつたりする。

スピカは全然知らないし、ついでに言えば、薬指の結婚指輪にも
彼女は
気づいてなかつた。

「リイラ、私、病気なのかな」

遊びに来たリイラ＝コルラッジに、スピカはすっかり『氣落ちした
様子で言つた。

「病氣！？ 何があつたの！？」

「なんかへんなの。アルトに褒められると赤くなるし、
アルトが誰かと楽しく話してると、悲しくなるの」

「それ、病氣じゃないわよ。恋よ恋」

「恋……？」

子供のようになにスピカが小首をかしげる。

頬を桃色に染めると、これが恋、と

咳き、まだずきずきと痛む胸に手をあてた。

魔女は恋心を自覚する（後書き）

やつとスピカが自分の想いに気付きます。少し遅いと思われるかもしませんが、幼い彼女の恋を見守つてあげてください。

魔女と使い魔は奔走する

スピカ＝ルーンは、朝から大忙しだった。

珍しく、初めての家事をしていたのだ。

使い魔・アルト＝ハルメリアがオロオロしている。

彼女の初めての試みは、大失敗だつた。

皿を洗おうとすれば全て割り、洗濯をすれば破くか、干すとときにすつ転ぶ。料理をすれば手を切る、もしくは

（何故か）爆発を起こす。掃除をすれば逆に

散らかすといった感じで、ついにアルトに、低い声で

何もしないでください、と叱られた。

スピカが何故家事をしようとしたのかというと、自分の

アルトへの思いを自覚したからだつた。

アルトが他の女性と仲良くしているのを見てしまい、どこかへ行つてしまふのでは？と恐怖したのだ。

彼のために何かしたいと思い、早速やつたのだが、空回りしていた。

アルトは首をかしげながら、皿の破片を片づけ、洗濯をやり直し、台所をぴかぴかに磨き上げていた。アルトは訳がわからなかつた。今まで何もしょうとしなかつた女主人が、いきなり私が家事をする、と言つてきたのだ。全て失敗していたので、心配になり、何もしないで

、と叱りつけてしまつたが。

彼女がけがをしているのを見るのが、とても嫌だつた。悲しかつた。彼女に知つてほしいと思つた。自分の気持ちを。自分が、どれだけ彼女のことを見つけているかを。

『告白しちゃつたら？』

友人であるメリッサ＝ウォーカーの言葉がよみがえり、アルトは

赤くなつた。でも、今は言えない。言つて、普通の顔で君を私も好きだ、と言われたくなかった。使い魔としての愛情なんて、アルトは求めていなかつた。一人の男としてみてくれないのであれば、愛なんていらなかつた。

「スピカ……」

初めてさんをつけずに呼んでみる。少し赤くなつていると、ドサッと何かが倒れる音が聞こえてきた。

「スピカさん……！」

アルトが駆け付けると、スピカは顔を真つ赤にして倒れていた。目がぐるぐると回つている。額に手をあてるど、やけどしそうなほどの熱が手に伝わってきた。

「アルト……あつい……なんで……？」

「だ、大丈夫ですか！？ 立てますか！？」

アルトはかなり軽い彼女を抱き上げ、ベッドまで運んだ。

「ちょっと待つてくださいね、すぐに戻りますから

「いかないで」

ぐいっとスピカがアルトの服の裾を引っ張つた。おもいがけず強い力に、彼はつんのめつた。

「どこにもいかないで

「わがまま言わないでくださいよ、氷とか薬とか買つてきますから。

リイラさんにも連絡しないと……」

「リイラ……今日……出張中……仕事……

……

いない……」

「うう、うそおおおおおつ！…」

アルトはつい絶叫してしまつた。リイラ＝コルラッジは、スピカの親友である。しつかりした女性で頼りになるのだが、それがいない

なんて。

ぐいっと引つ張られ、アルトはスピカのベッドの上に倒れこんだ。

「いたたた。スピカさん、なにするんですか！！」

「とおくにいかないで。わたしのそばからはなれないで」

アルトは目を見開いた。唇にやわらかい感触が伝わってくる。

スピカの唇が、アルトの唇に重なつていて。

「ずっと・・・・わたしの・・・・そばに・・・・」

それだけ言うと、スピカはかわいらしい寝息を立てて眠ってしまった。

真っ赤になりながら、アルトは首をかしげる。

元々鋭いたちではないので、彼女の思には気づかなかつた。

アルトはスピカの財布から少しお金を持ちだし、馬車に乗つて王都シユザリアにやつてきた。

歩き回つていると、友人のメリッサと会つた。

「アルト、今日も買い物？」

「メリッサさん！－！スピカさんが風邪になつたみたいなんです。

薬とか、売つてるお店しりませんか？」

「家によつていけるなら、薬くらいわかるよ。氷もたくさんあるしね」

にっこりと笑つた彼女は、仕入れ中らしく、果物や卵の入つた袋を持つていた。小麦粉の大袋を、後で届けてくれるよう、店の人に頼んでいる。

彼女は『占いカフェ・カツサンドラ』の店主なのだった。

「ありがとうございます！」

アルトは持ちます、とメリッサの荷物を取り上げた。

店に着くと、メリッサはすぐに薬を取つててくれた。袋に入つた

いくつかの氷も渡してくれる。

「これ、アイスの作り方ね。食欲なくても、冷たいアイスなら食べれるかもしないから」

「ありがとうございます、助かりました！！」

「いいよう。人形の魔女によろしくね」

「はいっ！！」

アルトは再び馬車に乗り、館へ戻つていった。

田覓めたスピカが、ぎゅうっと抱きついて来て、顔が赤くなる。

「どこにもいかないでつていつた・・・・・・」

「い、じめんなさい。薬とかを買ひに行つていたんです。・・・・

・・あつ！！ 体温計がないっ！！」

買い忘れた、と悲観したが、薬が入つた袋と一緒に入つていた。メリッサに感謝し、スピカに渡す。

「熱、はかつてください」

「やりかたわからない」

アルトは泣きたくなつた。男としてみられていないのかな、とショック

を受けた。嘆いていても仕方ないので、田を閉じてスピカのわきの下に体温計をはさむ。あつと声が上がつたので、思わず田を開いてしまつた。

そして、後悔した。見てしまつた。女の子の裸を。

「あつ・・・・・これ、いらない・・・・・」

「こんなところで脱がないでくださいっ！！」

いきなりスピカがローブを脱ぎ捨てたのだ。どこまでも平坦な体の造り。

少年のような体の線。白すぎるほど肌。細すぎる体。

かあつと紅くなり、慌てて田をそらしたアルトは、スピカに新しいローブを着せかけた。薄い青色をしていて、一番薄い素材だった。

「すずしくなつた」

「何か、食べれますか？」

「いらない～」

メリッサのメモを思い出し、アルトは少し彼女のそばを離れた。

アイスクリームの造り方は、思ったより簡単だつた。

氷やいろいろなものを入れ、くるくるとまわしていく。

冷たいアイスは、甘くておいしかつた。ところと口の中だとける。アルトには、初めて食べるものだつた。これなら彼女も食べられるかもしねい。しばらく冷やして、一番良くなつた、チョコレート味のをスピカのところへ持つていつた。

ついでに、枕を氷枕に變える。

スピカの紅い目がきらきらと瞬いた。またた

銀色のスプーンで、ガラスの入れ物に入つたアイスをすくいあげる。

「おいしい・・・・・。あまい・・・・・・」

さつきよりスピカの顔色はよかつた。こころなしか、顔もあかくな
いような

・・・・・？ と思う前に、アルトはバタンッと倒れた。
ずっと看病していたせいか、スピカに口づけされたせいか、風邪を
うつされたようだ。

「アルトッ！？」

正気に返つたスピカが叫ぶ。そのまま、アルトはスピカと入れ替わりに、

ベッドの住人になつてしまつたのだつた。

仕事を終えて帰つてきたリイラとともに、スピカの看病を受け、アルトは

ぐるぐると皿を回していた。

おつかれさま、と事情を聞いたリイラが言つた言葉は、スピカの泣き声

でかきけされたのだつた。

魔女と使い魔は奔走する（後書き）

ほとんど使い魔のアルトが頑張るお話です。スピカも頑張りますが。
次は番外編のスピカのお話を書く予定です。

番外編 ～魔女になつた訳～

スピカ＝ルーンの本名は、アナマリア＝ベルといつた。彼女はこの名前を一度捨てている。これは彼女が、魔女となる前の物語である。

アナマリアはかわいらしかつたが、大人しく内気な娘だつた。天真爛漫な愛くるしい妹・アネットと、厳格な、教会に住む両親と暮らしていた。

火と水のようく違う姉妹たちは、とても仲がよかつた。村人たちも、両親もこの姉妹を愛した。特に仲がよかつたのが、リイラ＝コルラッジだつた。彼女はとても優しく、お気に入りの装飾品を

おしげもなく一人にくれた。モモという花の髪飾りと、きらきらと輝く星の髪飾りだつた。

アナマリアの好みは、人並み外れていたが、これだけは毎日つけていた。

真つ白い雪のような二人の髪に、それはとても良く映えていた。楽しい毎日は続いたが、それは彼女が十歳になるころにそれは終わつた。

幼い妹が、八歳で体の弱いアネットが、奉公に出ると言い始めたのだ。

両親は猛反対した。リイラとアナマリアも、あまり良い顔はしなかつた。

けれど、彼女はすっかり決意していたらしい。

一度はあきらめた振りをし、家を飛び出した。

そして、すっかり体を悪くして戻ってきた。

奉公先で何かがあつたらしい。

死ぬ間際、彼女はアナマリアに一言を残した。

「おねえちゃん、おかあさんたちに、えんりょばつかしてちやダメだよ。

ちやんとじぶんにしょ「しきに、いきてね」

この言葉が、アナマリアの運命を変えた。

彼女がそう言わなければ、アナマリアは魔女になどなつていなかつただろう。

そのまま村で教会の仕事を継いでいたはずだった。

彼女が魔女になる決意をしたのは、リイラがアナマリアの家から、紫色の地に、ダビデの星『ヘキサグラム』が書いてある魔導書を持ちだして来てからだつた。アナマリアは青ざめて止めたが、リイラは冗談半分で、悪魔を召喚してしまつたのだ。

その召喚に必要だつたのは、資質ではなく、汚れなき血だつたのだ。だが、資質がなければ契約はできない。リイラには資質は欠片もな

く、

アナマリアには資質があつた。

怒り狂つてリイラに飛びかかる前に、アナマリアは悪魔の前に飛び出した。

「あたしが契約するわー！だから、リイラに手を出さないで！」

「うまそうな血の娘だ。もちろんお前でも構わない。契約の対価は、

お前の一番大切なものだ。いいな

「いいわ

「アナマリア、ダメー！」

リイラが叫んだ。

「責任ならあたしが取るー！死んでも取るから、あんたは契約

なんてしちゃダメよつ！！

アナマリアは振り向き、黙つて首を振つた。悲しげな顔だつた。

「アナマリア＝ベルは、悪魔・サテリアルと契約をします」

「いいだらう、ケケケケケ」

彼女に対する対価は、？両親の愛？だつた。

その時は、彼女には、何を取られたのかわからなかつたけれど。

悲劇は、両親が家に帰つて来てからおこつた。

「おかえりなさい！！」

いつものように出迎えた娘に、両親は汚らしいものでも見るかのよつな目を向けた。びくつ、とアナマリアが立ち止る。

「お父様！？ お母様！？」

「誰がお前の両親だつて？ ふざけるんじゃねえよ、この化け物が！！」

「死んでしまえ！！ 化け物！！」

たとえ、アナマリアが、禁忌である契約を行つたのとしても、？愛？があつたのなら、両親は幼い娘を許したに違ひなかつた。私欲ではなく、大事な親友を救つためだつたのだから。

両親は武器を手に、アナマリアに襲いかかつた。

「あ・・・・あああああああああつ！！」

アナマリアは咆哮ぼうごした。死にたくない。
怖い。恐怖の心が彼女を支配していた。

アナマリアは手にしたばかりの力で、本能が命じるままに爪を変化させ、両親を切り裂いた。

血があふれ、一部は彼女の顔や服に飛んだ。

悲鳴が上がる。だが、アナマリアは止まらなかつた。

何度も何度も、死に絶えるまで攻撃した。人間が、肉塊に変わるまで。自分が力つくるまで。

リイラが家に駆け込んだ時、スピカは血の海で、倒れこんでいた。

両親の肉塊を胸に抱きながら。感情のない目でリイラを見つめていた。

アナマリアは、この日から、感情がないかのように、過ぐしていた。依頼がくるままに、何人も人を殺した。

三人目は、レヴァン＝コーラルという名だった。

悪徳高利貸で、妹が一人、いるらしい。

だが、アナマリアにはどうでもいいことだった。

「あなたがレヴァン＝コーラル？」

「あ？ なんだよ、お前」

「依頼のために、あなたを殺す」

「俺を、殺すだと？ 冗談も休み休み・・・・ぎやあああつ！」

風刃で彼の腕が片方、落とされた。血があふれだして、小さな血だまりをつくる。

彼は恐怖で顔をひきつらせた。腰が抜けたらしく、ズルズルと体をひきずつて後ずさるうとする。

「ひつ！ ぐ、来るな！ 来るなあつ！」

「殺す殺す殺す殺す」

「み、見逃してくれ、オレには妹がいるんだ！！ オレが死んだら、どんなに

ディオナが、あいつが悲しむことが・・・・」

「だーめ。依頼人は、あなたを殺せといつたから」

断末魔の悲鳴が響く中、少女はただ笑っていた。

それから、彼女は名も知らぬものたちを殺した。

殺しまくった。心は壊れたかのように、感情は消えていた。

そんな時、血にまみれた彼女に、声をかけてくれたものが、いた。

「ねえ、君、家に来ない？」

その女性は、とても美しかった。紅い目と金の目、右目と左目で色が違っていた。どちらも、見えていないらしいが。

「なぜ、私に声をかけたの？」

「きれいな魂があるなあつて思つたから」

「私は人を殺したのに…！　きれいな訳がないつ

「きれいだよ」。手は血に染まつたかもしれないけど、心はちつとも汚れてない。あんた、私欲で人を殺したんじゃないでしょ？　何人殺しても、後で後悔したでしょ？」

アナマリアは、人を殺してから初めて泣いた。

女性の胸に飛び込んで、大声で泣いた。

女性は、アリアドネ・ヘカテ・ルーンと名乗つた。新しい名前を彼女にくれた。

「スピカ＝ルーン？」

「うん。きれいな星の名前だよ。一等星なの。君にぴつたりだと思うよ」

それから、アナマリア改めスピカは、アリアドネ（略アリア）のもとでごすことになった。彼女は、『盲目の魔女』と恐れられる強大な魔女だつた。悪魔と契約した際、両目の視力を失つたらしい。彼女はスピカにいろいろな魔法を教えてくれた。

でも、いつまでも弟子でいるわけにはいかない。

免許皆伝をもらつたスピカは、師匠とともに一晩泣き明かした。そして、彼女の元から旅立ち、森に館を構えた。

元はアナマリア＝ベルという名だつた少女は、今はスピカ＝ルーンとして、生きているのだった。ちゃんと罪を背負つて。スピカは妹・アネットと、師匠であるアリアには、ずっと感謝しているのだった。

番外編 ～魔女になつた訳～（後書き）

彼女がスピカとして生きる前の物語です。次は本編に戻ります。

使い魔は魔女に反抗する

スピカ＝ルーンは、困り果てていた。

朝から、いつも通りにすることができない。
使い魔・アルト＝ハルメリアへの恋心を
自覚してから、なんとなく調子が悪かつた。
彼の顔を見るだけで、顔が赤くなる。

彼の名前を呼ぶことが難しい。

つい使い魔と呼んでしまい、彼に怒鳴られた。
アルトの様子もおかしい、とスピカは思った。
以前は使い魔と呼んでも怒らなかつたのに、
今は涙目になつて怒る。

かなりの大声で怒鳴りつける。

何故なのか、スピカにはわからなかつた。

アルトの思いを、彼女は欠片も知らないのだ。

アルトは今日はずっと館にいるらしい。
館をピカピカに磨き上げ、洗濯をし、
作ってくれた食事はかなり量が多かつた。
はりきつていいるようだ。

スピカは無言で、ふわふわに焼きあげられたパンやら、
野菜と魚介類たっぷりのスープやら、ソースをかけた
鶏肉の焼き物やら、デザートのチョコのアイスクリーム
をたいらげた。

作つたばかりの、黄色い地に、サクラの花の模様を
刺繡したローブを着て、いつものように白い髪を結つ。
ローブに刺繡をするのは初めてだつた。
リイラに、少しはおしゃれをしたら?
服に刺繡をするとかさー、

とか言われたからだ。

スピカは、アルトに似合つか、と聞いてみた。アルトは赤くなつて頷く。この動作を見ても、鈍い彼女は気づかなかつた。アルトも気づいていないので、おあいこと言えればおあいこだが。

と、座つていたアルトが、いきなり立ち上がつた。小首をかしげるスピカの前に、歩いてくる。少し近づくだけでも、彼女の顔は赤らんだ。それには気づかず、アルトは自身も赤くなりながら言つた。

「スピカさん・・・・・いや、スピカ」

本人の前で初めて呼び捨てにしたので、スピカは驚きで目を見開いていた。

「『』いうの、初めてだから、つたないかもしないけど、ちゃんと聞いてね」

「・・・・・」

ふわり、とアルトが優しく彼女を抱きよせた。スピカはその瞬間、火の中に投げ込まれたかのような錯覚におちいつた。顔から湯気が出ているかのように、顔が真つ赤だつた。

「僕は、スピカが好きだよ。今は、僕の事、男として見れないかもしてないけど、いつまでも待つから。だから、僕とつきあつてください・・・・・」

いくら恋愛にうといスピカでも、この言葉の意味がわからない訳ではない。

スピカは嬉しくなつた。

アルトが、自分と同じ気持ちだった。

はい、と返事をしようとして、スピカはためらった。
恐怖が心の隅にわいてきたのだ。

このまま、アルトの気持ちを受け入れた時、

私はどうなるのだろう。

そう思うと、怖かった。

気がつくと、スピカはアルトを突き放し、
首を振っていた。

「なんで？ 僕を、男として見れないってこと！？
僕は、あなたにとつて使い魔でしかないんですか！？
ずっと！？ 一生！？」

「うん・・・・・・」

スピカはアルトの顔が見られなかつた。

言つてから、後悔したけれど、もう遅かつた。

アルトはぐいっと彼女を引き寄せた。

あまりの力の強さに、スピカがきやつと悲鳴を

上げたが、構わなかつた。

スピカの唇に、アルトの唇が重なつた。

初めて彼からする口づけだつた。

だが、彼女がした時とは違い、むさぼるような、
奪うような口づけだつた。

長い口づけの後、アルトはスピカを突き放した。

彼の顔は、今にも泣きそつだつた。

「頭を少し冷やします。しばらく帰りません
くるりと身をひるがえしたアルトに、スピカは
さつと青ざめた。大声で叫ぶ。

「アルト！！ 待つてアルトッ！！！」

アルトは振りかえらなかつた。止まりもしなかつた。
バタン、と扉が閉まる音が響く。

床にぺたり、と座り込み、スピカは
すすり泣いた。ぼろぼろと、涙を流して
泣いた。言つたことは二度と取り消すことはできない。
そのことをおもいしつたスピカは、一晩中一人で
泣いていたのだった。

使い魔は魔女に反抗する（後書き）

アルトとスピカの恋愛が動き出します。こつまでもこのままではいけないので。

恋愛をあまり書いたことがないので、つたないです、これからもよろしくお願いします。

使い魔は葛藤する（前書き）

告白し、振られてしまつた使い魔、アルト。彼は館を飛び出し、ある場所へ行きついた・・・・・。

使い魔は葛藤する

使い魔・アルト＝ハルメリアは、身一つで友人のメリッサ＝ウォーカーのもとへやってきた。

彼女は、今にも泣きそうな顔で、「しばらく泊めてください」

と言つてきたアルトに少し驚いたが、笑顔で了承した。

「何があつたの、アルト？」

「ふられました」

「は？」

「ふられたんです！！　スピカに！！」

どかつとアルトは音を立て、椅子に座つた。メリッサは砂糖入りの紅茶を出し、アルトの前に座つた。

「ふられたつてどういうこと？」

「そんなこと聞かないでくださいよ！！」

僕は使い魔としか見られないんですつて！！」

大声でわめいてすつきりしたのか、アルトはしばらくの間黙つていた。

メリッサは仕方なく、ケーキの仕込みを開始していた。アルトがやってきて、手伝い始める。いいから、と手で制止しようとしたが、何も考えたくないからと言われ、やらせてやつた。こんなつらそうな目で言われたら、そうしてやらざるを得ないだろ？。

「アルト、泣いたつていいんだよ？」

「え？」

「あんた、最近いつ泣いた？」

ぴたりとアルトが手を止めた。

しばし考え込む。ここ五年ほど、泣いていない。

「悲しい時は、泣いた方がいいと思うよ。

お姉さんが胸を貸してあげるから、

思い切りお泣き」

「・・・・・」

メリッサの顔は母性であふれていた。

弟妹か、ひょっとしたら

息子がいるのかもしれない。

アルトはメリッサに抱きしめられ、

久しぶりに大声で泣いた。

すっかり目を泣き腫らしたアルトは、濡れタオルを目にあてていた。

メリッサは気遣わしげに目をやつている。

それでも、手はケーキづくりのために動かされていた。くるくるとクリームの入ったボウルをかき回している。

と、コンコンと外でノックの音がした。

「すみません、開店時間がすぎてるんですけど。
もしかして今日、お休みですか？」

「あ、はーい、今開けます」

がたつ、とアルトが立ちあがつた。青ざめている。

「どうしたの、アルト？」

「リイラさんだ・・・・・」

「リイラ？」

「リイラ＝「ルラツジ。スピカの親友です」

隠れてて。そう言い置いて、メリッサは戸を開けた。アルトがそつ、と部屋を抜け出して隣の部屋に隠れる。入ってきた少女は、アルトがここにいることなど、まったく知らなかつた。知る訳もない。

リイラはスピカの分のケーキ全種類と、自分とアルト用にチョコレートケーキを一つ買いあげていつた。

「よかつたやつていて、私の友達が、こここのケーキ大好きなんです」「光榮ですか、ありがとうございます」

リイラに手を振られ、メリッサは「ゴー！」していたが、すぐにアルトを呼びに行つた。

「アルト、一度帰つた方がいいんじゃないの？」

「嫌です」

「そんなにあの子と顔を合わせるのが嫌？」

アルトは悲しそうな顔で首を振つた。

「そんなことはありません。振られたことを差し引いても、彼女と会えないとさみしいですから」

「じゃあ、なんで？」

「何をするかわからないから」

アルトはため息をつき、冷めきつた紅茶を一口飲んだ。

メリッサは新しく紅茶を淹れ直し、アルトの前に置く。「僕、無理やりキスしちゃつたんです、スピカに」

「え、アルトが？」

「頭に血が上つていて、どうすることもできなかつた」

「・・・・・・」

「だから、怖いんです。また、彼女に狼藉ノハラヅキを働いてしまうような気がして」

アルトは手で顔を覆つた。ぽろぽろと、手の隙間から涙のしずくが垂れ落ちていく。

メリッサは黙つてそれを聞いていたが、やがて口を開いた。

「その時、彼女は嫌がつていた？」

「え？」

「キスした時、彼女は抵抗した？」

「して、ないです、けど・・・・・」

「じゃあ、彼女はあんたが好きなんじゃないの？」

「僕の話聞いてました！？ 彼女は僕のこと使い魔としか見れないって言つたんですね！？」

「彼女は怖かつたのかもしないよ。使い魔としてじゃない君と過ごすのが、怖かつたのかも」

「やめてください！－！ これ以上混乱させないでくださいよ」

わめきたてる、アルトはメリッサが用意してくれた部屋に飛び込み、そこでまた泣いた。

彼は知らなかつた。あの館で、魔女もまた、同じように泣いていることに。ただ彼女のことを想い、ひたすらに泣くばかりだつた。

使い魔は葛藤する（後書き）

アルトの方のお話を書いてみました。
次はスピカです。スピカが決意しないと、
二人の恋は進展しませんから。

魔女は一人涙する

スピカ＝ルーンは泣いていた。

一人で、使い魔少年、アルト＝ハルメリアを想つて泣いていた。

告白された彼女は、今までとは違う関係になるのが怖くて、彼をふつてしまつたのだ。都合がよすぎるとも思う。でも、どうしても怖かった。今は、心からあれは間違いだつたと気づいているけれど。彼のことが心から好きなら、恐怖など感じてはいけなかつたのだ。

「アルト……」

「スピカ！！ ケーキ買つてきたわよっ、一緒に食べよう？ と、あれ？ アルトは？」

親友のリイラ＝コルラッジが館にやつってきた。スピカは彼女に抱きつき、力の限りに泣き叫んだ。

「落ち着いた？」

十分後、リイラにピンクの花模様のハンカチを差し出され、スピカは腫れあがつた目で頷いた。並べられた大量のケーキを次々と食べていく。が、いつもよりペースはかなり遅かった。

「何があつたのか、話してくれる？」「ん……」

スピカは紅い目でしつかりとリイラを見つめ、口を開いた。その目はひどく悲しかつた。

「アルトに、告白、されたの」

「え……」

リイラは目を見開いた。スピカがアルトを愛しているということを、彼女は知っていた。

なのに、彼女の顔は悲しそうだった。

「OK、しなかつたの……？」

スピカの手が止まつた。カラソ、と銀のフォークが皿の上で音を立てる。返事はなかつたが、その態度が、肯定を物語つていた。

「どうしよう、リイラ……私、アルトに、

使い魔としてしか見れないのか、つて聞かれて、うん、つて言つちやつた！！

「どうしてそんなこと言つたの！？」

「怖かつたの、今までと違う関係つていうのがすごく怖かつた……」

黙つてリイラが立ちあがつた。びくつ、とスピカが身をすくめる。リイラは彼女の顔を覗き込んで言った。「勇気を出さなきゃ、アルトとは結ばれないわよ

「わかつてゐる、わかつてゐるけど！！」

「自分で考えなさい。私は協力できないわ。アルトと恋人になるのか、そのままアルトを使い魔として接するのか、選びなさい」

リイラの声は、いつもの優しいものとは違い、かなり厳しかつた。彼女が自分で考えなくては意味がない。

リイラは自分の主觀をスピカに押し付けるつもりなどなかつた。「ただし、そのまま使い魔として彼に接するのならば、アルトを解放してあげた方がいいわ。彼は、あんたを女性として愛しているのだから」

アルトが、いなくなる……。私の目の前から……。

頭から冷水を浴びせかけられたかのように、スピカの顔から血の気が引いて行つた。

紅い宝石のような目に、涙の粒がにじむ。

「じゃあ私、帰るわね」

リイラがそう言ったのにも、スピカには聞こえていないようだった。

すすり泣くような声が聞こえてきて、彼女は気遣わしげな目を向けた。

が、何も言わずに館から出て行つた。

スピカは泣いて泣いて泣きまくつた。声がかかるまで、大声を出して

わめいた。それが終わると、顔を冷水で洗つてたちあがつた。

ここでいつまでもこうしていたつて始まらない。

スピカはアルトへの想いを考えた。少し前は、彼は自分の使い魔、さらに言えば自分の所有物^{モノ}しかなかつた。

だけど、今は違う。スピカはアルトを愛してしまつた。

一人の少年として、男として。

彼を想うと胸が痛んだ。彼が、他の女の子と楽しそうにするのが嫌だつた。それが、たとえリイラでも。

そう思うと、最初から自分は気付かなかつただけで、アルトを好きだつたのかもしれない。

アルトは今、どこにいるのだろう。

あの人とのところへ行つたのかもしれない。

自分とは正反対のあの人。大人っぽくて、アルトも彼女といふと楽しそうだつた。私といふときよりも。

負けたくない、と彼女は思った。

アルトを本当に理解し、愛しているのは、自分だ。

それは彼女ではない。決して彼女ではない。

いや、彼女ならば嫌なのだ。自分でないと。

「アルト、戻ってきて……」

使い魔なんてやめてもいい。私のことを好きじゃなくてもいい。
だけど、アルトがそばにいないなんて、嫌だった。

「戻らないなら、お前が迎えに行つたらどうだ、スピカ」「エトワール！？」

いきなり館に入つてきた、貴族の少年の姿に、彼女は
大きく目を見開いて凍りついた。

魔女は一人涙する（後書き）

久しぶりの人が登場します。彼は今回のキーポイントなので、大活躍ですよ。

使い魔は協力者を得る

アルト＝ハルメリアは、ケーキ作りを手伝っていた。手元など一度も見ていないのに、ちゃんとそれらしいものができているのは、才能だろう。

アルトは何も考えたくない一心で料理をしていた。考えたら泣きたくなる。もう、恥も外聞も捨てて泣きわめくのは嫌だつた。

とーー。

「アルト、もう少しのくらいでいいんじゃないの？」

『占いカフェ・カツサンンド』の店主、メリッサ＝ウォーカーの冷たい声が飛んだ。

「え！？」

「チョコケーキばかりそんなにいらぬ」

「あ、『じ、じめんなさい！』」

アルトは赤くなつて下を向いた。アルトが作っていたのは、すべてがチョコレートケーキだつたのである。

これでは、誰の事を考えているのかバレバレだつた。チョコレートは、スピカの好物だつた。

「はつきり言つて迷惑なんだけど」

厳しく言われ、さらにアルトは落ち込んだ。けれど、いじょいじょ、と言われるよりはいたたまれなくない。

「一度帰りなよ。『じちや』じちや悩むから、こんなことなつてるんでしょう？」

「嫌です！－ 帰りたくない！－！」

「いつまでも、ここにいる訳にはいかないんだよ！－！」

正論を言われ、アルトは黙りこんだ。

彼女に迷惑をかけているのは事実であり、わがままを言つているのは、自分の方だつた。

メリッサは間違つていない。

「逃げてばかりじゃ、何も変わらないよ！！」

「つうつうつうつ！」

その時、客が来たのでメリッサはすぐに出て行つてしまつた。

「あら、あんた、久しぶりじゃない！！ うちの子はいないの？」

弾んだような声が聞こえて来て、アルトは首をかしげた。

親しそうな口調は、よほど近しいものだと思わせる。

「あんたにも紹介したい人がいるのよ、さ、入つてちょうだい。ほら、イリオスも早く！！ あ、いらっしゃいませ、レティ様」

レティ様！？ イリオス！？ アルトはギョッとなり、慌てて隠れようとしたが、

時すでに遅し、だつた。メリッサはすでに扉を開けている。

笑顔を浮かべているエトワール・クロウ・リルアラと、俺はいいです、

と彼に手を引かれて抵抗をしているイリオスと、きらきらと目を輝かせた

レティーシャ・エルト・モランが入ってきた。

アルトとエトワールの目が合い、あつ、と二人の声がかぶる。

「なんであなたがここにいるんですか！？」

「それはこっちのセリフだ！！ 何でメリッサの店にお前がいるんだよつ！！」

「あんたたち、知り合いなの？」

きよとん、としたようにメリッサが聞いてきた。一人が知り合いだと知らなかつた

らしい。レティがしたり顔で、説明を始めた。

「あのね、エトワールはスピカが好きなんだよ！！ そしてね、アルトとはこいのライバルなの！！」

「れ、レティ様！！」

慌ててエトワールが叫んだ。彼女は意味が分かっているのか、いないのか、

くちくりとした目をパチパチさせていた。

「ふう～ん、あんた好きな人いたのね」

「う、うるせえな、余計なお世話だ！！」

「あら、かわいくないこと！… あんただつて私の息子みたいなものなのに」

その時、エトワールの顔が一瞬だけ悲しみを染めたのを、アルトは見た。

イリオスがとがつた声で彼女に言つ。

「母さん、用つてなんですか、私は忙しいんですけど」「か、母さん！？」

アルトがびつくりして聞き返し、イリオスに冷たい目で睨まれた。かなりの違和感があつたのだ。イリオスとメリッサは、そつ変わらない

年に見えた。年は聞いていないので、本当のところは分からぬが。「本当の母ではありませんよ。父が再婚したんですね」

「そうなんですか、すみません」

ちょっと来い、とエトワールに引っ張られ、アルトは別室に連れ込まれた。

何度も来ているらしく、彼は勝手知つたる他人の家、といった感じだった。

「あんまり、あいつにメリッサの話させるなよ」

「どうしてですか？」

「あいつは、元々メリッサが好きだったんだよ。俺もだけど」

「結婚する前、ですよね」

「そうだ。だから、あいつはここにいつかないんだよ。俺はいつもでも来てるけどな」

「……ですか」

いつむいたアルトに、エトワールはここからが本題だ、と言つた。

「お前、スピカが好きなんだろ？」

「な、なななんんで知つてるんですか？」

「落ちつけよ。お前の態度見りや、誰でもわかるっての
「それがどうしたんですか」

アルトはひどい暴行をされたことを思い出し、臨戦態勢を取った。
苦笑しながらエトワールは言葉を返す。

「協力してやろうって言つてんだ、ひとまず座れ」
「協力！？」 あなたが！？」

「ああ」

「それで、あなたにメリットがあるんですか？」
すっかり警戒しているアルトに、さらにエトワールは苦い
笑みを浮かべた。何もしないといつことを示すために、
少し後ろに下がる。

「メリットっていうか、俺は好きな女には幸せになつてほしい
ものだからな」

「……わかりました」

彼の悲しみが見えた気がして、アルトは彼の提案に乗ること
にしたのだった。

使い魔は協力者を得る（後書き）

もうすぐ恋愛編もクライマックスです。
がんばりますので、ぜひ見てください。

魔女は男に騙される

スピカ＝ルーンは、いきなり現れた貴族の坊っちゃん、エトワール・クロウ・リルアラの登場に驚いていた。

「どうした、スピカ？」

「どうしてあんたがここに？」

「質問を質問で返すのは俺好きじゃな……『きやぐつ……』渾身の力を込めたパンチがエトワールの顔にめりこんだ。変な声上げた後、彼はのたうちまわっている。

「それで、私に何の用？」

「お前に協力しに来たんだ」

「私に協力？」

不審そうにスピカは眉をひそめた。自身でも気がつかぬ内に、小さな拳を握りしめている。

随分と嫌われたものだな、とエトワールは思つた。

まあ、一方的に好意を押し付けて、というかぶつけてきていたので、

彼には悪いが嫌われて当然だつ。

それに、アルトをボコボコにした時のことを、魔女は執念深く覚えていた。

「なにの見返りも求めずに？ それは話がうますぎない？」

「見返りはあるぞ」

そう言つと、さりにスピカの警戒心が強まつて行つた。じりじりと後ろに下がつていく。

子猫を相手にしているような感覚に、エトワールは小さく苦笑していた。

毛を逆立てた猫のよう、スピカが威嚇し始める。

「見返りって、何？」

「お前が幸せになる」

スピカの目がまんまるに見開かれた。口が〇の形になる。

エトワールが近づいたが、逃げようともしなかった。

「好きな女には、幸せになつて欲しいんだよ。たとえ、結ばれるのが、オレじゃなくてもな」

「因果な性格だね」

「だらう? だからかな、オレはふられてばかりさ。

一度も、好きな相手にこたえられたことはない」

「ごめんね……」

「わかつてたさ。あんたが、オレを見ていないことに。

だから、見ないふりをしていた。でも、それも今日で終わりだ」

スピカは自分から彼に近づいた。そつ、とその背に手を回す。

今度は、エトワールが驚く番だった。

「おい、スピカ、なんだよ! ?」

「罪ほろぼし……」

スピカの顔には、聖母のような笑みが浮かんでいた。体はとても小さいのに、心はかなり大きかった。

小さな体は、母のように温かかった。

「もう一度、言わせてくれないか? オレをふつてくれ。あきらめがつく」

「いいよ……」

エトワールはそつ、とスピカの体を突き放した。

勇気を奮い起して彼女の手を取り、口を開く。

「スピカ=ルーン。オレは、この世で一番あんたが好きだ」

「ごめんね、私は、あなたと付き合えないよ。

好きな人がいるから……」

スピカはもう一度エトワールを抱きしめた。

彼は抵抗しない。スピカのしたいようにさせていた。

「また会いに来るよ。今度は、友達としてそばにいさせてほしい。それならいいよな?」

「うん! …」

スピカはようやく彼を解放し、にっこりと笑った。

五分後、スピカはエトワールに作つてもらつたお菓子を食べながら、作戦会議をしていた。

彼は以外にお菓子作りがうまかった。

どうしてか聞くと、知り合いのケーキ屋に入り浸つているからと答えが帰ってきた。一口食べて、知り合いが誰なのかを知る。

その味は、『占いカフェ・カツサンドラ』の味と似ていた。

悔しいぐらいおいしい味は、彼女の好きな味である。

チョコレートのムースをスプーンですくいながら、

スピカは彼女の顔を思い出して落ち込んだ。

アルトが、楽しそうに話していた人。

ケーキ作りが上手い人。

アルトが、赤くなつて照れていた、人。

「まづかつたか、オレのケーキ！？」

ギヨツとしたように味見をしだす彼に、スピカは小さく笑つた。

「ケーキはすごくおいしいよ。だけど、あの人のことを思い出して悲しくなつたの」

「ああ、あいつか」

「アルトは、本当にそこにいるの？」

「ああ……」

スピカは入れたばかりの紅茶のカップを落としそうになり、エトワールが慌てて受け止めた。あちあちあち、と悲鳴が上がる。

ちなみに、今日の紅茶はハーブティーだった。

スピカが入れたものだ。料理はからつきし駄目な彼女だが、何故かお茶は入れるのは上手かつた。

「気をつける、スピカ！！」

「ごめん……」

エトワールはカップをスピカの前に置き、ため息をついた。

メリッサ＝ウォーカーのことを想いつと、彼も悲しみを禁じえなかつた。彼女は自分を「息子の友達」としか見ていない。告白したこともあつたが、「あたしもあんたが好きよ～」と軽く返され、落ち込んだのはつい最近のことだ。

「どうしたの？」

「なんでもない」と言い返し、エトワールはフォーカクをケーキに突き刺した。一度に大きい塊を持ちあげ、一口で食べる。

行儀が悪かつたが、スピカは小さく笑うだけで注意はしなかつた。メリッサが見ていたら、げんこつの一つは落としだらう。

「……で、作戦の話をするぞ」

「うん……」

「あいつはかなり独占欲が強くてな、アルトは一步も外に出してもらえないんだ。頼つていつたものの、

アルトも困つてると思うぜ」

ペラペラと出でてくる嘘にて、エトワールは自分にサギの素質でもあるのかな、と思つた。

イリアスの方が、もつと嘘はうまいと思いつが。

「それで、私はどうすればいいの？」

「アルトを取り返す。アルトへの思いを彼女にぶつけて戦うんだ。あなたより、私の方がアルトを愛してゐる、みたいな、ことを言つてな」

スピカは顔を真つ赤に染めながらも、コクリ、と首を縦に振つて了承を示した。

魔女は男に騙される（後書き）

エトワールが大活躍です。彼には悪いですが、あの人には一人の愛の架け橋みたいな感じになつてもらっています。

次回もみてください。

使い魔は男と密談する

アルト＝ハルメリアは、エトワール・クロウ・リルアラと話しあつていた。

つまんない、とわめくレティ姫やせつかく面白そうな話をしてるのに、とぶつぶつ言うメリッサ＝ウォーカーを一時排除して、一人になっている。

ちなみに、イリアスは早々に姿を消していた。彼はここにはいつかない。その代わりのように、エトワールはちょくちょくここに来ていた。メリッサもこころよく迎えて嫌がらないし、居心地がいいからよく居座つてしまふのだ。

「ボクは何をすればいいんですか？」

キツ、と顔を上げてアルトが聞いてきた。かなり真剣な顔だ。エトワールはつい吹き出してしまい、真っ赤になつた彼から怒鳴られた。

「何で笑うんですかっ！」

「いや、そんな顔しなくてもと思つてな。

マジメだよな、お前」

「悪いですか！！」

「いぢいぢケンカ腰になるなよ、からかつただけだろ？」「びり！」

アルトは渋々口をつぐんだ。

頭から湯気が出そなほど顔が赤い。

エトワールは苦笑しながら口を開いた。

「お前は基本何もしなくていい

「え？」

「実行するのは、メリッサとスピカだけだ」「どういふこと……ですか？」

「お前はただ隠れていればいいから。

後は、スピカにバレて怒りだした時、謝り倒してもう一度告白しろ」

「……ボク、完全にカッコ悪くないですか？」

泣きそうになるアルトに、エトワールは耐える、とだけ言つたという。

砂糖を入れたストレートティーを運んできたメリッサに、エトワールは作戦の概要を話すこととした。

「メリッサ」

「なになになにな、早く教えてよ」

きらきらと目を輝かせながら二人を見ている。

とりあえずカップはテーブルに置き、メリッサは空いている椅子に座った。

早く早くと明らかに目がそう言つていた。

エトワールが笑いながら言つ。

「お前は、スピカを挑発しろ。

スピカは上手く言いくるめてあるから、徹底的に悪女を演じろ」

メリッサはにっこりと笑つた。

ビクッ、とアルトが身をすくめる。

背中に夜叉が見えたのは、アルトの勘違いではないだろう。

「どういうこと、かなあ？」

「だから——」

さらに説明しようとしたエトワールは、

メリッサの顔を見てギョッとなつた。

愛想笑いをするが、もう遅い。

「そんなことしたら、人形の魔女に嫌われちゃうじゃないの、

「かあああああああああああつ！！」

「ぎやああああああつ！！」

ボコボコに殴られるエトワール。

アルトは耳をふさぎながら、

現実逃避してスピカの笑顔を思い出していた。

一時間後、ようやく自分を取り戻したメリッサは、自分が殴りつけたエトワールに治療の術を施していた。

「魔術が使えるんですね」

初めて見る魔術に、アルトは目をキラキラさせていた。前に一度、スピカが壊れた物を直す術をかけたのを見ていたが、その後で彼女が倒れたので、それどころじゃなくてあまりよく覚えてはいなかつた。

「私は、人形の魔女と姉妹弟子なんだよ。スピカが姉弟子だから、私も魔術くらい使えるよ」

「そなんですか！！」

意外な関係に、アルトは目を丸くした。

メリッサは得意げにいろいろと話してくれる。

「私と彼女は、属性は違うけどね。

スピカ＝ルーンは闇、私は光。

回復系がかなり得意だよう

「みんなのしそうでするい！！」

話している最中に、レティーシャ・

エルト・モランが飛び込んできた。

眉を吊り上げて怒つている。

するいするいするいと地団太を踏み

ながらわめく姿は、とてもかわいらしかつた。

「あたしにも何か任務ちょうどよいおおおお！」

スピカにためにあたしもなんかしたいいいい

メリッサとエトワールは目くばせしあつた。

ややあって、エトワールが彼女に近づく。

「レティ姫。あなたにもちゃんとした任務がいりますよ」

「ほんとうー？」

エトワールがそう言つと、瞬時に

彼女の顔が輝いた。メリッサが部屋を

出て行き、少しして戻つてくる。

ケーキをいくつか詰め込んだ箱が、

レティに差し出された。

「レティ様、これをお父様たちに届けて
くださいませんか？ 代金はいりません。
メリッサ＝ウォーカーからの気持ちですわ」

「おいしそう、あたしもたべていいの？」

「もちろんです。任務を果たしたら、
いくらでもいただいてください」

「やつたあつー！」

上機嫌になつたレティは、エトワールを
伴つて城に戻つて行つた。

体よくあしらわれたことに、まだ幼い姫
はまったく気づいていなかつたという。

「さあつ、おいしいケーキを焼かなくちゃ。
アルト、手伝つてねー！」

「あ、はいっ！…」

とりあえず、二人はスピカが来るまでに大量のケーキを量産することにした。

昨日アルトが焼いた分だけでは、甘党の彼女には足りないからだ。

部屋にはすっかりチョコレートの甘い香りがたちこめ、帰ってきたエトワールが閉口した。

「レティ様はどうだつたの？」

「おいしいケーキを食べて、満悦ですよ」

「それはよかつたわ」

「ところでさあ、お前ら、こんな香りばっかのところにいて、よく気持ち悪くならないな」

「当たり前でしょ。ケーキ屋だもの」「食べるのも作るのも大好きですから」

エトワールが口元をひきつらせた時、コンコンと戸を叩く音が響いて、全員の顔が引き締まつた。

戸の前にいたのは、白い髪を一つに結つて星の髪飾りをつけた少女だつたー。

使い魔は男と密談する（後書き）

次回はメリッサとスピカの
対決シーンを設けています。
殴りあつたりはしませんが。
次回もよろしくお願ひします。

魔女は任務を遂行する

スピカ＝ルーンは、部屋で一人悩んでいた。エトワールが教えてくれたことを考えている。床に寝転がっているので、白い雪のような髪はくしゃくしゃ。その頬にも、床の木目のあどがついてしまっていた。

それでも、スピカは動かない。怖かった。また、彼に会うのが。

拒絶されるのが怖かった。

あんなに怒っていたのだ。

でも、二度と会えないのは嫌だった。会いたい。彼に会いたい。

会いたい！

アルトに会いたい！！

キッ、とスピカは顔を上げた。

「アルト、待つてね」

スピカは、白い髪をきつちりとツインテールに結い、ピッカピカに磨いた星型の髪飾りをつけていた。アルトがかわいいと言つてくれた、かわいらしい桜色のローブ姿だった。彼女は今、彼がいるという、

『占い喫茶・カツサンドラ』の戸口の前に立つていて、

胸がドキドキと高鳴る。

だが、こうしていても始まらない。

スピカは上質な木の扉を叩いた。

「はーい、入つて」

女性の声とともに、扉が開く。

勇気を振り絞り、スピカは中に入った。

大量のチョコレートケーキと、甘い香りがスピカを歓迎した。

ついごくりとつばを飲み込んでしまい、

慌てて彼女は顔を引き締めて

その女性を見つめた。

アルトと仲がよさそうに話していた女性だ。

なかなかの美人だったので、それだけでも

負けたようで、彼女はムツとなつた。

「座つて」

「はい」

声をかけられ、スピカは言われた通りにした。

音も立てずに椅子に腰下ろす。

称賛の輝きがその目に見えて、スピカは戸惑つた。

「何の話に来たのか、もう、わかつてますよね」

「ええ。でも、その前にケーキをいただいてくださいな?

あなたのために焼いたのだから」

時間稼ぎ!? でも、そんなことをする理由がない。

スピカは悩みつつも、ケーキの魔力に負けて

それを食べ始めた。すごくおいしいので、

止まることなく食べていく。

もう少しまずかつたら、残してやるのに。

スピカは悔しげに顔をゆがめながら、大量のケーキを

次々と口に運んで行つた。

瞬く間に、ケーキが載つた皿は綺麗に空になつた。

差し出されたナプキンで口元をぬぐい、

スピカはキツ、と彼女を見た。

「アルトを出してください、連れて帰ります」

「どうしようかしら、私も、アルトが好きなのよね」

「私の方がアルトを好き！！ 愛してる……」

とその時、何か物音が聞こえてきた。

首をかしげてその音が聞こえた方を

見るスピカに、彼女はひきつった笑みを浮かべた。

「今の音、なんですか？」

「息子がいるのよー！ もう、まつたくしおりがないわねえ、やんちゃかりでーー！」

「そうですか……」

スピカの興味が薄れたのを見て取つて、

彼女はホツとして笑みを浮かべた。

音がした方をキツと睨んでいた

けれど、スピカが語り出したので、

そちらに慌てて目を移した。

「それで、お話の続きですが、

私はアルトを愛します！！

アルトがいなくては、生きていけませんーー！」

「本当に愛しているの？」

「もちろんです」

彼女は意地悪そうな笑みを浮かべていた。

スピカは一瞬ためらい、だがそれを顔に出さないようにしている。

「アルトは、あなたが使い魔としか見てくれないって言つていたけれど？」

音を立ててスピカが立ち上がる。

その顔が、さつ、と青ざめた。

今にも倒れそうな顔だ。

再び物音がし、彼女が戸^戸を強く叩くと
静まつた。スピカの方にも、変化がある。

一步も引かない強い目が、

彼女を睨み据えていた。

「確かに、最初はそう思つてました。

最初は、彼は私の中で、^モ所有物

でしかなかつた。ですが、私は気づいたのです。

アルトは、ただの使い魔ではなく、一人の男、だと

よしつ、と彼女がガツツポーズをした。

懸命にかわいらしい口を動かしているスピカは、

それには気づかない。

「私は、アルトを愛します。一人の男として、

一人の人間として」

「なら、どうしてアルトを拒絶したの？」

その問いを聞いても、もうスピカは青ざめなかつた。

「私は、怖かつた。アルトと、使い魔と主としてではない
関係を作るのが、怖かつた。でも……もう、怖くない」

逃げるということは、それ以上先に進めないと

いつことに、スピカは気づいていた。

逃げれば、永遠に彼の心を手に入れるなど
できない。永遠に、彼を失つてしまう。

そんなのは、嫌だつた。

「それ以上に、アルトが好きだから、

恐怖より、アルトを好きの方が勝つていいから、
私はもう逃げない。アルトを連れて帰ります」

くすくすと彼女は笑つていた。

カツとスピカの顔が赤くなる。

「何がおかし……！」

「おかしいのじゃなくて、嬉しいのよ

「は？」

「出でらつしゃい、アルト、エトワール
スピカは頭がくらくらして、思わず
椅子に座りこんだ。

アルトはともかく、エトワール！？
私にいろいろなことを教えた
彼が、なんでここにいるの！？
まさか……。

担がれたと知つたスピカの眉
が、きりきりとつりあがつた。

白い顔が、耳まで真っ赤になる。
ひつそりと出てきたアルトと
エトワールの頬を、平手打ち
した彼女は喚くような声で叫んだ。
「アルトも、エトワールも大嫌い！！」
ショックを受けるアルトの顔を、
笑いながらメリッサが見ていた。

魔女は任務を遂行する（後書き）

今回はスピカ視点で
物語を進めているので、
メリッサの名前が
最後しか出てきません。
次はアルト視点の
お話と、このお話
の後どうなったかを
書きたいと思っています。

使い魔は魔女を見守る

アルト＝ハルメリアは、エトワール・クロウ・リルアラと共に、隠れていた。

ここからは、彼女の顔は良く見える。この前かわいいと言ったローブ

を着ているのは分かつて、アルトは嬉しくなった。

「ひとまずは、成功だな」

小声でエトワールが言ってくる。

はい、と笑顔で返し、アルトは彼女を見入っていた。メリッサが座つてと言い、スピカが音も立てずに座る。彼女がほめるような目を向けたので、スピカは困ったような顔をしていた。

「何の話をしに来たか、わかつてますよね」久しづりのスピカの声！！

アルトが身を乗り出しそうになり、

慌ててエトワールは止めていた。

「落ちつけよ

「あ、ごめん……」

アルトは心を落ち着かせるために、

メリッサが用意してくれたお茶を口に運んだ。

ほどよく冷めている。お茶はローズティーだった。

メリッサの言葉に従つて、ケーキを頬ほる

スピカは、とてもかわいらしい。

いつものように、瞬く間に平らげてしまった。

アルトは魅入られたかのようにそれを見ている。エトワールはそこまで興味はないので、

お茶とともに用意させたアップルパイを食べていた。

甘さ控えめなそのパイは、彼の好物である。

と、そういうしている間に、二人の会話は進んでいた。

「アルトを出してください、連れて帰ります」

「どうしようかしら、私も、アルトが好きなのよね」

「私の方がアルトを好き！！ 愛してる……」

アルトが椅子を転げ落ちた。かなり大きな音が響く。

エトワールは舌打ちして彼を助け起こす。

アルトの顔は、これ以上ないほど真っ赤だった。

「このバカ！ バレたらどうする！！」

「ごめ……びっくりして……」

小声でやりとりし、二人は気配を殺した。

スピカが不審そうな顔をしていて、

メリッサがごまかしているのが見える。

メリッサ、ごめん、とアルトは心中で謝った。

顔の赤味はなかなか抜けない。

メリッサの言った通りだつた。

スピカは、自分のことを愛している。

自分だけじゃないと知り、アルトは

嬉しかつた。涙が出そうなくらい、

嬉しかつた。

「これ、いるか？」

涙目になつたアルトを見て、エトワールが

白い上等そうなハンカチを差し出してきた。

アルトは気持ちだけ受け取つて断り、

スピカの方に目線を戻す。

「アルトは、あなたが使い魔としか見てくれない
、つて言つていたけれど？」

その言葉を聞き、スピカが青ざめた。

彼女が以前倒れさせたことを思い出し、アルトも青ざめる。
思わず扉を開けそうになつたアルトを、慌てて

エトワールがはがいじめにした。彼の肘がテーブルにあたり、ガシャン、とカッ普が揺れる。

メリッサが扉を叩くのが見え、エトワールはそのまま後ろに下がった。

「黙つて見ていられないなら、お前、家に帰すぞ」「ごめん……なさい……なるべく静かにする」

怖い顔で睨まれ、アルトはしゅん、となつた。

エトワールはアルトを解放し、アルトが椅子に座る。エトワールは予想外な大変さに、ため息をついていた。アルトは基本大人しいが、スピカがからんとくると違うのである。

「確かに、最初はそう思つてました。

最初は、彼は私の中で、モ所有物

でしかなかつた。ですが、私は気づいたのです。

アルトは、ただの使い魔ではなく、一人の男、だと

エトワールは、その言葉を、一抹の寂しさと共に聞いた。忘れたいと思つても、なかなか忘れられない。彼女への想いを、捨てきることなどできない。

「エトワール……」

「大丈夫だつて。そんな顔するなよ。俺は、スピカを好きになつたこと、

後悔してないからな」

気遣わしげに見られると、腹が立つものがある。だが、エトワールは懸命に怒りをおさめた。

誓つたのだ。彼女をあきらめると。

「私は、アルトを愛してます。一人の男として。一人の人間として」

スピカは一步も引いていない。

アルトは少し気持ちが落ち着いた。

エトワールの方は、気にされても向こうが

困るだけだと気づき、もう見ないようにしている。

「なら、どうしてアルトを拒絶したの？」

「私は、怖かった。アルトと、使い魔と主としてではない関係を作るのが、怖かった。でも……もう、怖くない」
アルトの心が温かくなつた。まるで、熱いお茶を飲んだ時のような温かさだ。

「それ以上に、アルトが好きだから、

恐怖より、アルトを好きの方が勝つているから、私はもう逃げない。アルトを連れて帰ります」

それを聞いた後に、メリッサが笑いだした。ようやく出ていいというお許しが出て、アルトたちは扉を開けて出ていく。

スピカは一瞬驚いたような顔をしていたが、騙されたことに気づくなり、怒りをあらわにした。

「アルトもエトワールも大嫌い！！」

平手打ちを受け、宣告されたアルトは、今度こそ泣きそうになつていた。

その後、アルトはスピカの機嫌取りに忙しかつた。スピカはつん、とそっぽ向いたまま、彼の方を見ようともしない。

すべてのネタバラしをした、エトワールも。「やつぱり思つた通りだつたな」

「かなりくつきりとあとがついてるわね」
くすくすとメリッサが笑つてゐる。

エトワールも笑つたので、キッとスピカは彼を睨みつけた。振つた腹いせではないとは思うが、振つたすぐ後にこんなことをされるのは苛立たしかつた。

「スピカ、ごめん！！ 試すよつたことしてー！」

でも、不安だつたんだよ！！」

「つるさいうるさいうるさいつ！！」

スピカはケーキを頬ぼつたまま、

叫ぶように言つた。エトワールも許せないが、それ以上に許せないのが、アルトだつた。

裏切られた気持ちになつたのだ。

「もういい！　アルトなんか……」

「あら、もらつちゃうわよ？」

「ダーリンはどうしたの？」

計画のことを話した後、メリッサは既婚者であることも彼女に話していた。じろりと睨まれ、メリッサはくすくす笑つている。

「あら、彼氏としてじゃなく、息子として貰い受けるのよ。そうしたら、アルトはあなたに会わせないわよ。

大嫌い、なんでしょう？」

スピカが今にも泣きそうになつた。

冗談だと気づいていらないらしい。

「大嫌いだけど、大好きなの！！」

「矛盾してるわね」

「うるさいつ！！」

大好き、と聞き、アルトが彼女を抱きしめた。スピカは突き飛ばそうとしたけれど、

結局やめて彼の背に手を回す。

唇と唇がぴたりと重なつた。

「私もダーリンに会いに行こうつと！－－

ひさしぶりに工房に行くわよ」

メリッサはその場にあつたケーキを包むなり、すぐに店を飛び出した。

エトワールも中に入るのはいかず、外に出る。と、歩いてくる少女の姿が見えた。

「リイラである。

「おい、今中に入らない方がいいぜ？」

「何ですか？あなたに言われるいわれはありません」

「スピカとアルトが中にいるんだ」

リイラは目を見開いた。どういうことかと聞いていただそつとしたけれど、別な店を紹介するから行こうと言われ、悪くない気持ちになつて彼の手を取つた。

使い魔は魔女を見守る（後書き）

ついにスピカとアルトが結ばれました。
次回は、突然ですがスピカが
竜の子供を育てるという話に
しようと思います。
次回もよろしくお願ひします。

魔女は竜の子供を見つける

スピカ＝ルーンは、久しぶりに笑顔で目覚めた。隣には、当たり前のように、使い魔の、アルト＝ハルメリアがいる。

そのことが、何にもまして嬉しかった。

当初彼女は使い魔はやめていいと言ったのだが、アルトが断つたのでそのままなのだ。

アルトの意見を聞くと、スピカの近くに自分以外の？使い魔？がいるのが嫌、らしい。

アルトは久しぶりに家に帰るなり、家中をピッカピカに磨き上げ、花壇に花の種を植え、使っていない鶏小屋につがいのひよこを置いた。

もちろん、スピカのために最高の朝食も作ってくれた。今日のメニューは、たっぷりチヨコレートソースをかけた鶏肉のソテーと、野菜サラダ、野菜スープだった。やつぱり最高のお味である。スピカは上機嫌で食べた。

「行つてくるね、スピカ！！」

「いつてらつしゃい！！」

今日からアルトはメリッサのもとで働くらしい。

余ったケーキがあつたら持ち帰つてあげるね、と言つてくれたのが、とてもうれしかった。

スピカはたまつていた仕事を片づけ、手持ちぶたさになつて裁縫を始めた。チクチクと針を動かす音だけが響く。

青い絹地に、紅い花が咲いた。

しばらくそれをやつていたが、あきてスピカは外に出た。馬車に乗り、久しぶりに村の方へ行く。

村の様子は相変わらずだつた。スピカは両親を殺したため、疎まれている。全然来ないリイラに会いに行つたのだが、彼女は留守だつた。

反応は相変わらずで、スピカは石をぶつけられて森の中に逃げた。と、その時である。

世にもかわいらしい声が聞こえてきた。

スピカが振り向くと、そこには紅いきれいな色をした竜がいた。とてもかわいらしくて、

スピカはそれに手を伸ばす。まだ、子供のよつだつた。

「かわいい……」

火を吐くかもしれない、と思つたが、人懐こいらしく、竜はすり寄つただけだつた。親はいないのか、と森中をさがしたけれど、結局暗くなるまで見つからなかつた。

「おいで、オリオン……」

名前をつけた竜の子供を胸に抱くと、スピカは馬車に載つて家に戻つた。アルトはすでに帰つていた。

「ただいま、スピカ！――」

「お帰りなさい、アルト！――」

「あれ、その子は？」

「オリオンよ」

当たり前のように言われ、あ、そのの、と言ひかけて、

アルトは慌てて口をふさいだ。

「じゃなくて、どうしたのつてこと。その子――」

「森で見つけたの。親がいないみたいだから、

飼つてもいいでしよう、アルト？」

涙目で言われると、アルトも動物とかが嫌いではないので、元の所に返してこい、とは言えなかつた。

「いいよ。でも、ちゃんとスピカが面倒みてね。

ちゃんといろいろ教えるんだよ」

アルトはにこりと笑うと、オリオンと名付けられた竜の子供の

頭を優しく撫でた。オリオンはかわいらしく鳴き、アルトの手にも顔をすりよせてくる。その様子はとてもかわいい。

「じゃあ、『はんにしようか』

「うん……」

幸せそうに微笑む一人。だが、その幸せは長くはもたなかつた。それが壊れたのは、アルトが今日の夕御飯の鳥の丸焼きを持ってきた、その時だつた。オリオンは小さな口をあんぐと開けるなり、すごい勢いでそれを平らげてしまったのだ。

小さいとはいえ、さすが竜。ものすごい食欲である。

そして、オリオンの種族もこれではつきりした。

満腹になつた彼は、大きな火の息を放ち、それが

家中に燃え移つたのだ。火竜の息そのものである。

「うわあああああああっ！！ 家が燃える燃える！！

「お、オリオン！！ 駄目でしよう！！」

「いいから早く火を消して！！」

慌ててスピカは術を唱えて水を出したので、家は燃えずに済んだけれど、アルトはこの子大丈夫なのかなあ、と思うのだった――。

魔女は竜の子供を見つける（後書き）

スピカが火竜の子を連れてきました。
すごい食欲と悪びれない（てゆーか
悪いことがわからない）火の吹き方
に、アルトはもう大変な感じです。

魔女と使い魔は言い合ひする

「ぎゃああああああつーー！」

森の中に、大声が響き渡る。

びくつ、となり、スピカ＝ルーンは目覚めた。ベッドから落ちそうになり、慌ててベッドのへりを掴む。寝間着のまま外に出ると、泣きそうな顔をしたアルト＝ハルメリアがいた。

「オリオンが、オリオンが……」

「オリオンがどうかしたの！？」

スピカは青ざめた。眠気が一気に吹き飛ぶ。

「オリオンが、ひよこを食べちゃったんだよーー！」

花壇も種が土ごとなくなつちゃつてるしーー！」

キッと涙目でアルトはスピカを睨みつけた。

鶏小屋を覗き込むと、そこにはちいさな骨がいくつか転がっているだけだった。やつておいた餌も、一粒もなくなつていて。

花壇は、否花壇であつたものは、煉瓦レンガだけがあつた。

その原因である竜の子供、オリオンは満足顔で空を飛んでいる。

「オリオン！！ 駄目じゃないっ！！」

スピカは降りてきた竜の子供を怒鳴りつけた。

オリオンはなんで怒られているのかわかつていられないらしく、かわいらしく首をかしげている。

だが、アルトの怒りはスピカに向いていた。

「こんな赤ちゃんが、悪い事とか分かる訳ないじゃない！！」

スピカ、君がちゃんと見てないから悪いんだよーー！」

スピカはうつむいた。昨日、スピカは確かにオリオンと一緒に寝ていたのだが、窓を閉めるのを忘れていたのだ。完全にスピカのせいだった。

スピカはムツとなりつつも、あえて口を開かなかつた。彼の言つてゐることが正しかつたからだ。

二人はお互に口を利かないまま、小屋に戻つた。オリオンも追いかけて入つてくる。

食事を作るために厨房に入つたアルトは、悲鳴のような声をあげて戻つてきた。

「どうしたの！？」

「オリオンが材料全部食べちゃつたんだよ！…」

スピカは慌てて厨房に入つた。貯蔵庫を

見てみると、何一つ残つていない。

卵の殻や、鍋の鉄の部分が転がつてゐるだけである。チヨコレートも、ミルクも、野菜も、小麦粉もなかつた。

「スピカ、やつぱりオリオンを返して来てよ。こんなんじや、僕達が暮らしていけないよ。

お金も無限にある訳じやないんだよ」

困つたように言われ、スピカはついにキレた。

朝からのストレスが一気に爆発したのだ。

「アルトはいいつていつたじやない！…

それなのに返してこいだなんて！…

無責任よ！…」

「無責任は君のほうだろ！…」

アルトとスピカは言い合いを開始してしまつた。

お互いを睨みあい、罵り合つてゐる。

その間に、オリオンはがじがじと壁をかじつていた。

「オリオンンッ！…」

アルトの怒りの矛先が竜の子供に向く。

物をぶつけてこちらを向かせようとしたので、

スピカはさらに眉を吊り上げた。

オリオンをしつかりと抱きしめる。

「さつき分かる訳ないって言つたじゃない！？」

オリオンにひどいことしないでよつ！！」

「教えてやらなきやいつまでもこうだろ！？」

しつけは動物に必要なんだよ」

「あんなのしつけじゃないわ！！ いじめよ！！」

オリオンはスピカの腕の中でじたばた暴れていた。

あんなに食べたと言つのに、まだ腹が減つているらしい。

スピカはさらに腕に力を込め、不満そうにオリオンは唸つた。
とーー。

「きやあっ！！」

いきなり噛みつかれ、スピカは驚いて手を放した。

オリオンはすぐに壁にたどりつき、再びかじり始める。

血がロープに伝わって滴り落ちた。

「オリオン……」

スピカはかわいがつていた動物にかみつかれ、ショックで泣きだしてしまった。オリオンに悪気はない。
ただ、邪魔をしたから噛みついただけだ。

オリオンは、何も知らない。悪い事も何も知らない。
アルトがオリオンに近づこうとした、その時。
グラグラと小屋が揺れ、やがて倒壊したー。

魔女と使い魔は言ひ合ひやる（後書き）

ついに記念すべき一十話です。
スピカとアルトのケンカの話、
だつたのですが、とんでもないことに
なつてしまひました。キャラが勝手に
動いてやつちゃいました。
次回は抑えるように気をつけます。

魔女と使い魔は友をたよる

小屋が倒壊してしまったので、スピカとアルトはメリッサ＝ウォーカーのもとへやってきた。

彼女は笑顔で迎え入れてくれる。

「あら、いらっしゃい二人とも。新作のケーキ食べていかない？」

「「食べます！…」」

見事に声が重なり合い、仲がいいわね、とメリッサにからかわれ、二人は紅くなつた。と、ふわふわと空を飛んでいるオリオンに目が止まり、そこでやつとここに来た理由を思い出す。

「あのー、メリッサ？ しばらくここに置いてもらつてもいい？」

「あら、どうして？」

メリッサはさらに笑みを深くしたが、ケーキとお茶を一人の前に置きながら聞いた。一人は目を見合わせる。

やがて、アルトが説明することになった。

「家が、崩れちゃつたんだ」

「はい？」

「だから、家が壊れたの！… この子、オリオンつていうんだけど、ものすごく食欲があつてね、家をかじっちゃつたんだ」

と、オリオンがごちそうを発見し、ケーキを食べようとしてに向かつたところだつた。ホールケーキめがけて一直線だ。

だが、メリッサがその襟首を掴むや、ぽいっ、と放り投げたので、オリオンはケーキを食べることができなかつた。

ムツとなり、噛みつこうとしたら、頭を強く叩かれた。

さらに噛みつこうとしたけれど、今度は拳が飛んできて吹つ飛ばされる。

渋々オリオンは引き下がり、メリッサが目の前に置いた分だけを

口にした。一人が驚いたようにメリッサを見る。

「すごいね、メリッサって……」

「そうね……」

「しつけはちゃんどしないと駄目よ？」

母のように言つてくるメリッサに、一人はメリッサつてタダものじやないな、

と想いながら、ケーキを一口口に運んだ。

ふわり、とスピカの顔がほころんだ。それは、チョコレートケーキだった。

だけれど、ただのチョコレートではない。アイスクリームを使った、

ところけるようにおいしいケーキだった。

アルトは悔しそうに眉をしかめた。ケーキ屋なのだから、メリッサの方が

ケーキを作るのが上手いのは当然なのだが、いつもアルトはメリッサの料理

の腕に嫉妬してしまったのだ。特に、スピカが彼女のケーキで笑っている所を見ると。

「アルトは子供よねえ」

メリッサがそう言い、アルトの眉がつりあがつた。

訳が分からぬ、といったような目でスピカが首をかしげる。

「どうして？」

「アルトったらねえ、私のケーキの腕前——

「わあああああああっ！——」

メリッサがくすくすと笑いながら言いかけたので、

真っ赤になつたアルトが大声を発した。

手を振りまわして彼女を睨む。

スピカは首をかしげたけれど、それ以上聞かずにケーキを食べ進めた。

「それより、メリッサ、さつき聞いたことの答えを教えてよ」

「もちろんOKよ。私は、あなたたちのことを自分の子供のように

想つてるんですもの。アルトは家で働いているし、スピカにも働いてもらつつもりでいるけれどね」

「え！？」

スピカが音を立ててフォークを置いた。自分の家事の腕前を思い出したのだろう、彼女は青ざめていた。

「わ、私、料理もそのほかの家事も苦手で……」

「裁縫が得意なんでしょう？ 開いたスペースに、仕立用の場所を作ろうと思ってたの。接客はしなくてもいいわ。一人、やとうつもりでいる子がいるから」

その時だった。

ちりりん、と扉につけられた鈴が鳴った。

一人の少女が、そこにやつてきたのだ。

それは、リイラ＝コルラッジだった。

スピカの親友の少女である。

「リイラ！？」

「スピカ！？」

お互い、ここにいることを知らなかつたので、二人は目を丸くしてみつめあつていた——。

魔女と使い魔は友をたよる（後書き）

スピカたちが場所を移ります。
これからも新キャラは増やす
予定ですので、次回も
見てください。

魔女たちは新たな生活を始める

スピカ＝ルーンは、アルト＝ハルメリアと共に、
『占いカフェ・カッサンドリ』で働くことになった。
スピカの親友・リイラ＝コルラッジも同じである。
スピカは朝からちくちくと針を動かしていた。なんのへんてつもない布に、花や蝶などの刺繡がなされている。
ほぼ手元を見ていないのに、すごい才能だつた。

アルトは接客やケーキ作りの合間に、彼女の姿を目で追っていた。スピカは裁縫に夢中で、彼の方を見ようともしない。
それに少しショックを受けながらも、アルトはつい彼女を見つめてしまうのだった。白い頬を上気させて彼女は、本当に愛くるしい。

一方、竜の子供、オリオンはといつと、ふわふわ浮いてお客様を魅了しながら、火を吹いたりして活躍していた。メリッサ＝ウォーカーも上機嫌である。

「アルト、仕事してよ……」

それに比べ、リイラは明らかに機嫌が悪かった。少しアルトの目がさまよう

だけで、カツとなつて怒鳴りつけたりしている。

アルトは恐縮し、そのたびに謝るのだった。

「リイラ、休憩に入つていいわよ。イライラしているんだつたら、仕事に入らなくていいわ」

メリッサが厳しい声で告げると、リイラはキッと彼女を睨みつけたが、

やがて黙つて店から部屋へと降りて行った。

スピカは驚いたような顔だった。気が長い方ではなかつたが、こんな

理不尽な怒り方をする女の子では、リイラはなかつた。

それなのに、彼女に何があつたのだろう。

「メリッサ、私も、休憩してもいい？」

「いいわよー」

そもそも、スピカが抜けたところで仕事に穴は開かない。

彼女の仕事は急ぎではないのだ。

メリッサが簡単にOKを出したので、スピカはリイラのもとへ急いだ。

「リイラ！」

スピカが声をかけると、うつむいて膝を抱えていた彼女は、びくつとなつて顔を上げた。その目が涙でぬれている。

「一体何があつたの？ どうして泣いてるの？」

「わ、私ーー」

リイラは迷うように口を濁した。目がさまよい、壁のあたりを見る。それでもスピカが重ねて問うと、彼女は告白した。

「私ーー。メリッサさんとアルトに嫉妬した……」

「嫉妬！？ どうして！？」

「だつて、スピカは私を頼つてくれなかつたーー！」

スピカの顔も悲しみに染まつた。

「私が村にいけない理由、知つてるでしょ？」

この前村に行つた時、追い払われた記憶はまだ新しい。

リイラはそれでも、悲しみが消えることはなかつた。

「それは分かつてゐるわ。でも、連絡くらいくれてもよかつたんじゃないの？ 私たち、親友だよね？」

責められたスピカは、ムツとなつた。せつかく会いに行つたのに、あの日、彼女はいなかつたのだ。

攻撃を受けるのも覚悟したのに。

「私、村に行つたの……でも、その時、リイラはいなかつた

「え！？ 村に行つたの？」

リイラの顔から血の気が引いていた。震える声は、どこか怯えを含んでいる。

「逃げて……逃げてスピカ！！」

「どうしたの、リイラ？ 何があつたの？」

すすり泣く声が彼女の口からもれた。顔を手で覆い、リイラはぼろぼろと涙をこぼして泣いている。

ただならぬ様子に、スピカは慌てた。

「ちゃんと答えてリイラッ！」

「魔女狩りが始まったの……。魔法生物も次々と狩られてるって教会の奴らが言つてたわ！！ あいつらは魔法生物や魔女の匂いに敏感な犬を持つてるの！！ ここもいづれ気づかれるわ！！！」

魔女狩り。その言葉に、スピカの体も震えた。

捕まつたら、確実に死が待つている。魔女狩りに捕まつたもので、生きていた者は一人もいない。

それに、魔女の使い魔にもそれは害を及ぼすのだ。

「嘘……でしょう？ 嘘だって言つて！！」

スピカはリイラの襟首を掴んで揺さぶった。八つ当たりだつてわかつてている。

だけど、どうしても彼女に嘘だつて、冗談だつて、言つて笑つてほしかった。

リイラはただ泣いて首を振るばかりだ。

スピカは自身もまた泣きたいと思つていた。アルトはどこまでもついて

きてくれるだろう。だが、スピカは彼を巻き込みたくなかつた。

せつかく、幸せな生活が待つていたのに、彼を命の危険のある旅に同行させたくはなかつた。だつたら、だつたら――。

「私が消えるしかないじゃない……」

「スピカ！？」

「リイラ、私、旅に出るわ。アルトのこと、頼んだわよ」

「スピカ！！ あなた一人で行くつもりなの！？」

「そうよ。誰も巻き込みたくない」

スピカの目には決意が秘められていた。唇は強くかみしめられ、手は痛いほどに握りしめられている。

「駄目！！ 行かせないわ！！」

リイラは言つても聞かないと思い、力ずくで止めようと彼女に飛びかかった。スピカは軽くよけ、壁に頭を打ちうける。

「うう……」

「ごめんね、リイラ」

スピカは彼女の頭に手刀を叩きつけた。信じられないというかのような顔になり、リイラはフツと倒れ込む。

「本当に、ごめんね……」

スピカの紅い目から透明な雫がこぼれおちた。

リイラをそのまま床に横たえ、スピカは部屋を出る。

「あら、もう休憩は終わり？」

「ええ。布を買つてくるわ。どうしても足りないものがあるの」

スピカは声の震えを隠そつと必死だった。笑顔を作り、悟らせないよう苦労をする。

「いつてらつしゃい」

アルトが気づいて笑顔で手を振つた。スピカは泣きそうになるのをこらえなくてはならなかつた。彼が好きだ。離れたくなんかない。ずつとそばにいたい。だが、彼を失う痛みよりはたえられる。

「いつてきます」

スピカは愛しそうにアルトの手に触れ、それから温かい店を、一度と戻らないであるう居場所を、出て行つた——。

魔女たちは新たな生活を始める（後書き）

スピカがアルトのそばを離れます。
ずっとギャグが多かつたので、
今回はシリアスが続くと思います。
次回も見てください。

魔女は失踪する

スピカ＝ルーンは走っていた。

あまり体力があるほうとはいえないのに、少し走つただけで息が切れてしまつて、顔はつねではないほど紅い。それでも、彼女は走るしかなかつた。

もつと遠くに。もつともつと遠くへ。魔法は使えない。あまり強い術を使って、倒れるわけにはいかない。なので、スピカはない体力をふりしぼつて走つていた。

「アルト……」

彼にはもう会つてはいけない。そのはずなのに、スピカは会いたくてたまらなかつた。

紅い目から零が垂れ落ちる。前会わなかつた時も、たえがたい痛みが胸を刺していたのだ。だが、永遠に失うよりはマシだ。

たえなくてはならない。絶対に……。

スピカは歯を食いしばつて胸の痛みにたえていた。

その様子を、一人の少女が見ていた。

ためらいがちな視線である。装飾の施されたナイフを握る手は、震えていた。

彼女は、スピカの暗殺者、ディオナ＝コーラルである。『スピカ＝ルーン……』

今なら彼女を殺せる。彼女はこちらに気づいてもいな、なのに、なのに……。

どうしても手も体も動かなかつた。

このナイフには、致死量の毒が仕込んであつた。

投げつければ、いくら魔女であろうとも、死ぬはずだ。

だけど、殺せない。手が少しでも動けば、殺せるのに。ディオナはまだ誰かを殺すことをためらっていた。

かなり前に、この魔女を傷つけたことがある。

その時感じた胸の痛みは、今も胸にある。

「兄さん……私、どうしたらしいの？　兄さんはあいつを、スピカ＝ルーンを憎んでるの？」

小声で呟いても、それにこたえる声はない。

彼女の兄はもうこの世にはいないのだから。

彼女はどうしても動くことができないまま、スピカ＝ルーンが、敵かたきである少女が、

通り過ぎていくのを見つめていた——。

スピカは完全に息を切らしていた。ずっと走っている。体力のない彼女に、たえきえるものではない。

スピカは少し立ち止まつた。無理をして走っていたからか、『占い喫茶カツサンドラ』からはかなり離れていた。

……しまつた！　舌打ちをしながらスピカは後退する。彼女は、いつの間にか、村に来ていたのだ。

両親と、愛しい妹アネット＝ベルの思い出が残る、村に。何も考えずに走つたのが悪かったようだ。

「魔女だ！！　スピカ＝ルーンがいるぞ！！」

どうしよう、このままでは掴まってしまう——！　スピカの顔からだんだん血の気が引いて行つた。

もう走ることはできない。

それに、この村に今はリイラ＝コルラッジはないのだ。

「教会に連絡しろ！　ここに魔女がいるぞ！！」

スピカは何もかもをあきらめてへたり込んだ。

唯一の救いは、そばにアルトがないことだろ？

スピカを発見した男が、彼女の白い手を掴もうとした、

その時だつた。

鈍い音を立てて、巨大な簾が落下してきたのである。

それは古臭かつたが、頑丈そうな造りだつた。

迷つてゐる時間は無い。

スピカはそれをひつつかむと、何も考えずにまたがつた。

何の前触れもなく簾が浮き上がる。

スピカは、数秒後には空を飛んでいた。

「魔女が逃げるぞーー！！」

男の怒声を聞きながら、スピカは安心した気持で空をただよつていた。果物のポブリの匂いが、さらに気持ちを高揚させる。

師匠の匂いだつた。師匠が助けてくれたのだ。

スピカは別れ際の彼女の言葉を思い出していた。

『たとえ分かれても、あなたは変わらず私の弟子だから。いつでも見てるよ、あなたを。いつでも助ける』

師匠は、ちゃんと見ていてくれたのだ。

ちゃんと、約束をはたしてくれたのだーー。

その頃、アルトとメリッサ＝ウォーカーは、心配そうな顔になつてゐた。買い物に行つたはずの彼女は、いつまでも帰つて来ない。

それに、リイラのことも心配だつた。

客の切れ間に、アルトはリイラがいる部屋へと向かつた。

「リイラさん？」

声をかけるが、返事がない。いぶかしげに思つて扉を開けると、倒れ込んでいた彼女が見えた。

「リイラさん！！」

慌てて駆け寄る。息をしているのが分かり、

アルトは少し安心した。揺り動かすと、彼女の目がぱちりと開いた。

「スピカ！！」

リイラの第一声は、せつぱつまつたよつた悲鳴のよつた声だつた。

「スピカ！　スピカ！　スピカ！」

「落ち着いてください！　スピカさんは、買い物に行つたんですよ」
リイラはようやく落ち着きを取り戻したらしく、涙が浮かんだ目でアルトを睨みつけてきた。

「買い物ですつて！？　そんな訳ないわ！　スピカは、旅に出るつて言つていたんだもの！…」

「旅なんで！？」

そんなことは初耳だつた。目を大きく見開くアルトに、苛立つたようにリイラは叫んだ。

「魔女狩りが始まつたの！？　あんたを巻き込ませないために、スピカは一人でいなくなつたのよ！…」

「スピカが…」

アルトは強いショックで口が利けなくなつた。ずっと一緒にいたいと思った少女が、黙つて姿を消してしまつたのだ。
しかも、心配させまいと嘘までついて。

アルトは泣きそうな想いで立ち尽くしたー。

その頃、『占い喫茶カツサンドラ』では、やきもきしながらメリッサがアルトの帰りを待つていた。
うわのそらでケーキを作りながら、ため息をつく。
と、その時だつた。

どんどんどんどん…！　といきなり戸が乱暴に叩かれたのだ。

「おい…！　開けろ…！　魔女がいるのは分かつてゐるんだぞ…！」
メリッサは青くなり、作りかけのケーキを床に取り落としたー。

魔女は失踪する（後書き）

魔女が彼らの前から姿を消したことを
気づかれます。店にやつてきた、
教会の使者！！二人はどうなるのか…？
次回も見てください。

使い魔は魔女を追いかける

扉を蹴破る音がその場に響き渡った。

メリッサは一瞬肩を震わせたが、やがて

キッと顔を上げると、入ってきた男と対峙した。

「ここに何の用かしら？　ここはただの店よ。

営業妨害で訴えられたいのかしら？」

「客は一人もいないだろう」

男はにやりと口元をゆがめていた。その目にあるのは、狂氣。

メリッサは底知れぬ恐怖と必死に戦っていた。

「失礼なこと言わないでくれます？

いつもはもつと客がいるのよ」

「魔女がここにいるだろう？　早く出せ！」

男はメリッサの言葉にも耳をかねず、どこを見ているのか分からぬ目で一方的に言つた。

メリッサは半分嘘で半分本当なことを言い返してやつた。

「魔女はここにはいないわ。スピカ＝ルーンは、

ここにはいない」

「お前使い魔か？」

「私は使い魔じゃないわよ！！」

そう叫んだものの、彼女は冷静ではいられなかつた。ここには魔女の使い魔がいる。アルトがこちらに来ないことを祈るばかりだつた。

「妖しいな……これでもくらえつ！！」

「きやああつ！！」

メリッサは悲鳴を上げた。いきなり液体を体にかけられたのだ。それは、おそらく聖水だろう。

メリッサの肩にかかつたそれは、服ごしでもかなりの効果があり、彼女の肌を焼いた。

否、とかしたのだ。聖水は、魔女は使い魔に対しかなりの劇薬になる。

「う……ああ……」

メリッサはあまりの痛みにうずくまつた。男はそんな彼女を蹴り倒し、胸倉をつかんで引き立てる。

「お前、魔女だな？ 殺してやる！！」

片手で出されたナイフが彼女に迫る。メリッサは悔しげに顔をゆがめたが、覚悟を決めて目を閉じた。その時である。

「やめろっ！！」

叫んだのは、アルトだった。投げつけられた調理器具が男の手に当たり、ナイフが落下する。

「メリッサ、逃げて！！」

隣にいたリイラが、男に飛び蹴りをくらわせてその上に乗つかつて手首をひねりあげた。

「こ、小娘が……！」

力が足りず、すぐにリイラは突き飛ばされてしまった。だが、キッと睨みつけて彼女は叫ぶ。

「殺せるもんなら殺してみなさいよ、私は人間よ。あなたたちに人間が殺せるの？」

男は憎々しげに彼女を睨みつけたが、手を出そうとはしなかつた。教会や村の人間は、魔女たち以外には手を出してはいけないという掟があるのである。

リイラは教会の娘の知り合いであったので、それを覚えていたのだった。

「逃げてメリッサ！！ このままじゃ殺されるわ！！

ここは私が守る！！ 教会の奴らには手出しさせないわ！！」

アルトはどちらに加勢したらいいのか迷っていた。

そのすきをついて、男が聖水を彼に投げかけてくる。

「冷たい！！」

メリッサと男とリイラの目が大きく見開かれた。アルトは真正銘スピカ＝ルーンの使い魔である。一方的に契約を反故にすることはできないから、彼はまだ契約を遂行中のはずだった。

なのに、聖水に彼は反応しなかつた。

彼の指一本でさえ溶かすことはできなかつたのだ。

「アルト、あんたつて何者なの？」

「……ぼ、僕にもわからぬよ。どうしてこんなことになつたんだろ！？」

アルトは混乱して頭をかきむしつた。

と、謎の声が彼の頭に響いてくる。

？坊がスピカの使い魔かや？ わらわはスピカ＝ルーンの名付け親にして師匠じや。あの娘に会いたいのならば、わらわの言つた通りにするのじや？

「あなたがスピカの名付け親？」

この声はアルトにしか聞こえていらないらしかつた。

驚いたような顔でリイラが見ている。

「アルト、誰と話しているの？」

？坊、スピカの妹弟子を連れて外に出るのじや。

あの娘の言つたことは本当じやから氣にすることはない？

一瞬何のことか分からなかつたが、思い出して合点がついた。メリッサとスピカは姉妹弟子である。スピカの妹弟子とは、メリッサのことに間違ひなかつた。

「リイラ、ここは頼んだよ、メリッサ来てっ！！」

戸惑う彼女の腕を引っ張ると、アルトはそのまま外に飛び出した。男は追つてこない。

うまく、リイラが足止めしてくれていいのだらう。

「どうしたつていうの、アルト！ いきなり何なの！？」

？妹弟子にこう言つがいい……。星の魔女の名のもとに？

「えーっと、星の魔女の名のもとに……」

そのまま言うと、メリッサの顔が驚愕の色を示した。
目からこぼれた涙が、地面に落ちて消えていく。

「師匠……」

メリッサはもう何も聞かずにアルトについて行つた。
アルトも無言で歩き続ける。疲れても疲れても
歩き続けた。愛しい少女に、スピカに会うために。
その間、スピカたちの師匠からの連絡はなかつた。
だから、一人はひたすらまっすぐに進んでいた。

体力が続く限り歩き続け、ついに二人は
へたり込んでしまつた。今日はここで野宿をするしか
ないだろう。宿に泊まるにしても金はないし、
教会からの連絡がいつていたら困る。

「メリッサ、ごめんね、もう少し早く来ていれば、
君は怪我をしなかつたかもしれない……」

アルトは涙目でメリッサを見ていた。

否、実際にはメリッサのやけどの後を見ていた。
「何言つてゐるの、助けてくれたじやない。

あんたがいなかつたら、私は死んでいたわ」
メリッサは本能的な恐怖で身を震わせた。

彼が間に合わなかつたら、確実に自分は死んでいた。

そのことが、今更ながらに怖かつた。

「スピカは、今どこにいるのかしら？」

「分からぬ……。でも、スピカの師匠がまた
連絡をくれると思つ……」

二人はたまたま持つていたチョコレートを

半分に割つて食べ、その口はそこで眠りに就いた——。

使い魔は魔女を追いかける（後書き）

アルトがついに店を出でいきます。
いきなり連絡をしてきたスピカの
師匠。星の魔女だと名乗る
彼女の正体は——？

魔女は教会の使者に襲われる

スピカ＝ルーンは、上空を簾で滑走していた。
ぐんぐんとスピードを上げて走っている。

何も考えなくてすむように、彼女はただ
簾を走らせていた。

そうしていないと、泣いてしまいそうだった。
あまりにも彼と、使い魔であり、恋人のアルト
と別れるのは辛かつた。

「アルト……」

と、その時だった。

「いたぞ、魔女だ！！」

「魔女スピカ＝ルーン！！ 降りてこい！！！」

下の方で男たちが集まり始めていた。
スピカはあきれたようにため息をつく。
どこかの世界に、殺されると分かつて
自ら命令にしたがつて降りる者が
いるのだ。いる訳がない。

「本当にしつこい……！！」

スピカは体内で魔力を練り始めた。

詠唱の輝きがスピカを包む。

スピカは男たちを殺すつもりだった。
殺らなければこっちが殺られる。
ここで死にたくはなかつた。
詠唱が終わつた。雷の塊が

スピカの手にある。

男たちはギョッとなつたように後退し始めた。
「逃げたつて無駄！！」

スピカは雷の塊をかがけて男たちを

睨みつけた。今、ここでこれを落とせば
こいつらは死ぬ。スピカは助かるのだ。
だが——。

スピカはそれを落とすことができなかつた。
アルトの悲しげな顔が浮かんだのだ。
もし、スピカが身を守るためとはいえ、
人を殺したと分かつたら、アルトは
悲しむかもしれない。

そう思つたらとてもできなかつた。

「できない……」

手の中の雷はしだいに色を失い、
そのまま消滅した。スピカは悲しい
思いを抱えてそのまま移動する。

「くらえ、魔女っ！！」

「きやあっ！！」

しかし、敵は身の危険を感じたのか
攻撃に転じてきた。聖水入りの水鉄砲である。
大量の聖水が彼女を襲つた。

肌が焼ける匂いがスピカの鼻をつく。

そのまま彼女は簾から転落し、
その場に叩きつけられた。

なんとか受け身を取り、威力を殺す。

完全には殺しきれずに、彼女は怪我を負つてしまつた。

「姑息な手を……！！」

スピカは唇をかみしめながら、

男たちが水鉄砲を構えるのを見ていた。

一方、その頃。

ディオナ＝コーラルは悩んでいた。

目の前に広がるのは、憎い敵である

かたき

スピカ＝ルーンが二人もの男たちに囮まれている光景である。

彼女は怪我をしているらしく、

悔しげに睨みつけながら動かない。

今、動けばディオナは彼女を助けられる位置にいた。反対に、動かなければ敵は死ぬ。

聖水が魔女や使い魔や魔法生物に劇薬に

近いのは、もちろん彼女だつて調べ済みだつた。もしここで死ななくても、彼女は連れていかれていあぶりになるだろう。そうしたら、間接的にディオナは兄レヴァンの敵を討つことになる。だが、どうしても釈然としない想いがあつた。ここでスピカを見殺しにしたくない何かが。

「どうして？　どうしてあたしがこんな

ひどいやつを、魔女を助けなきやいけないのよ」
言い聞かせてみても、心はざわづばかり。

ここで見殺しにしたら一生後悔するような気もした。ディオナはその気持ちを、「敵を奪われたくないからだ」と勝手に結論づけ、彼女に向かってずんずんと大股で歩いて行つた。

魔女は男たちを憎々しげに睨みつけていた。動こうと努力はして見るものの、体が上手く動いてくれない。

やつぱり体には相当のダメージが加わつていたらしい。

聖水は魔女にはかなりの劇薬。それを大量に浴びたのだ。

と、ここでスピカはあることに

気付いた。男たちの手が震えている。

彼らも必死なのだろう。

一步間違えば、死の危険さえある魔女狩り。

それに挑んだのは、

きつと魔女と捕えて連れて行けば、報奨金がもらえるからだろう。

彼らはプロではないのだ。

（あれを落とせれば、逃げられる？）

スピカは男たちに見られないように魔力を練り始めた。ごくごく少量の魔力だ。これならば、相手が怪我をすることなく撃ち落とすことができる。

（お願い……！！ 気がつかないで！！）

だが、小粒の火球を放とうとしたスピカのもぐろみは外れた。こちらに攻撃して殺そうとしている勘違いした男たちが、

一斉に聖水を噴射してきたのだ。

スピカは悲鳴を上げ、その場に倒れ込んだ。

「う……くうう……」

うめき声が響き渡る。スピカはよろよろと手を出して立ち上がろうとしたけれど、もうその力さえ残つていなかった。

「おい、殺すなよ？ 報奨金が減るぞ」

「分かってるって。でも、あと一回

なら大丈夫だろ？ まだ意識を保つていいようだしな」

「いいかげに……」

いい加減にしなさい、そう言つつもりだった声は、口がうまく動かすに相手には伝わらなかつた。

後一度それをくらえ、スピカは気を失つて連れていかれてしまうだろう。

こんな年で、こんなところで、死ぬのだろうか。

どうせ死ぬなら、アルトのそばがいい。

彼にもう一度会つてから死にたい。

スピカの目から涙があふれだした。

迫りくる聖水が、彼女には毒のように思えてきた。何故か時間がゆっくりしている気がする。スピカの目には、それがやけにスローに感じていた。

と、その時間がついに終わった。

一つの影がスピカの前に飛び出して来たのだ。

その人物が聖水をかぶつたので、

スピカに一粒さえもあたらなかつた。

「あ、あなたは……！？」

驚きに見開かれる紅い目を、睨むように少女の瞳が見つめていた——。

魔女は教会の使者に襲われる（後書き）

突然魔女が襲われる。

死にかける彼女を、

助ける少女。

彼女はどうなるのか！？

次回もよろしくお願ひします。

魔女は少女に助けられる

自分をかばつてくれているのは、
らかに自分を敵だと かたき

明らかに自分を敵だと
して襲つてきたあの少女だった。

名前はディオナ＝コーラル。

どうして彼女がこんなことをしたのだろう。

「誰だ、貴様は！？ お前も魔女か？」

「んなやつとあたしと一緒にするんじ
デイサナゲでねは棒に繋つけて置く。

びくつ、ヒスピカは身をすくめた。

「あたしは魔女なんかじゃないわ！！

股も焼けでないんだから見てみなさいよ、!!!!

ないことをアピールし始めた。

若いとはいえない少女がそんな行動をしてきたので、

「ハイホーは舞も荒く歌を正す。」

「ふんつ、分かつたらいいのよー。」

スピカは訳が分からなかつた。

彼女はいまだに懐々しげに男たちとスピカを睨みつけている。その視線に、親しげな色はひとかけらたりともなかつた。

偶然でかばえるものではない。

それは、おおじでにほしゆかおれかのなかた
でうして自分をかばつたりなじしたのだね。

敵だと、殺してやると常日頃から言っていたのに。」「勘違いするんじゃないわよー！」

スピカ＝ルーン！！

「え？」

「あんたを助けたんじゃないからね！！

あんたを殺すのは、私なのよ！！

他の誰にも敵を譲つたりしないわ！！」

ドンッと力を込めて突き飛ばされ、

スピカはよろよろとその場を後退した。

キッと怒りを込めたような瞳が睨む。

「早く行きなさいよ、殺されたいの！？」

スピカは素早く身をひるがえした。

ありがとう、という言葉は胸に秘めて走り出す。

この少女には、今は聞きたくない言葉であろうから。

「待て、この魔女め！！」

「させない！！」

スピカを追いかけようとした男の一人に、
ディオナの蹴りが炸裂した。

男はディオナが人間であると知つていて、
手を出すことが出来ずにスピカが消えていくのを
悔しげに見つめていた。

（そうよ、私はあいつをかばつたんじゃない。

敵を取られても困るもの。だからとりあえず助けただけよ。
それ以外のなにものでもないわ）

ディオナは自分に言い聞かせると、キッと目の前の
男たちを睨みつけていた。

スピカは息を切らせながら走っていた。

魔女狩りが始まった今では、馬車に乗ることも
できないだろう。万が一にも乗れたとしても、
その馬車の御者に降りた後で通報されるか、
馬車が襲われるかのどちらかだろう。

筆さえも失つた今としては、スピカはただ走るしかなかつた。
幸いにも、ここには教会の使者はいない。

頬を真っ赤に染め、呼吸を荒くし、

ただ彼女は走るだけだった。

走れるだけ走ると、スピカは体力がつきかけてきたので少し休憩を取ることにした。

今は誰もいないので構いはしないだろ？

「ふう……疲れた」

のじがカラカラでお腹も空いたけれど、残念ながら
くる燐科も待つことはないから。

水も食料も持つてはいかないへ
とお腹から音が鳴る。

ぎよつとなつて周囲を見たものの、誰もいないので安心した。

「少しこれがちがうかも……」

そう思つた時だつた。

獸の悲鳴のよだれが聞こえてきたのだ。

スピカは慌ててそこに近づいた。

すると、腹を空かせた魔物が獣、といふか動物を

スピカは軽い炎の術で魔物を追い払い、
襲っているではないか

動物を助けた。普段はこんなことをしない。

腹が減つたら動物も魔物も死ぬ。

それが分かっているから手は出さない。

スピカは一旦魔物に近づいて果物のようなものを

あげると、抱き上げた動物と共にそれを食しながら歩き出した。みずみずしくおいしい果物である。

たぐれどおののきの心の纏わぬ心せられ、

お腹もいつぱいになつた。

お前、名前なんてやつだよ。

「~~~~~」

動物はスピカの言葉に、その動物特有の言語で語りかけた。スピカは頷き、動物をなでる。その動物は長い耳をしていた。ウサギ、というのに特徴がにているが、尻尾はかなり長いので違うだろう。

「そう、リリアっていうのね。

お前、女の子なの。親や兄弟は？」

「~~~~~」

「そう、はぐれたの。一緒に来る？」

「~~~~~」

「うん、分かつた。一緒に行こうね」

ウサギに似た動物、リリアを抱きながら、スピカはゆっくりと歩き出した。

森の中ならば、追手も来にくいだろう。

それに、食料が大量にあるのとちようどいい。

スピカはそこでふと思い出して笑ってしまった。

「変なの。私、少し前までは一週間とか、

何も食べなくてもお腹なんか空かなかつたのに」

研究していたら後は飢えなんかどうでもよかつた。

さすがに水分は取つていたが、リイラが来ない時には何日も食べない日が続いたのに。

それが変わったのは、アルト＝ハルメリアが来てからだった。

彼は決して食べないことを許さず、いつ何時でも三食作つてくれていた。

アルトのことを思い出すと、胸がひどく傷む。

目から涙をこぼし始めたスピカに、リリアはなぐさめるように鳴きはじめ、涙をなめた。

「泣かないで、って言つてくれてるの？」

「ありがとう……」

新たにできた相棒に微笑みながら、スピカは
しばらく泣いていたーー。

魔女は少女に助けられる（後書き）

スピカに新たな相棒ができました。
ウサギみたいな変わった動物です。
次回はアルト編にうつりますが、
どうか次のお話もよろしくお願ひします。

使い魔は友と共に行動する

スピカ＝ルーンが森に逃げ込んでいる頃。使い魔、アルト＝ハルメリアと、その友、メリッサ＝ウォーカーはあたりを警戒しながら歩いていた。

誰もいないのを確認し、歩き出す。

メリッサはだんだん明るさを取り戻していた。そのことがアルトには安心を与えていた。

「スピカ、見つからないわね」

「うん……」

アルトたちは声を待ちながらスピカの探索を続けていたが、いまだ見つけられずにいた。スピカの師匠を名乗る者の連絡は途絶えている。こちらから連絡する方法は分からぬので、どうしようもないのだった。

メリッサにも聞いてみたが、まったく分からぬらしい。

「アルト……！」

と、メリッサが悲鳴のような声を上げた。

草むらに何かがいる。ガサガサと草をかき分けるような音がその場に響いていた。

「誰だ！……出てこい！……
誰何の声を上げるアルト。

一瞬、草むらの中が静まったが、

やがて一人の少女と少年が姿を現した。

「アルト、ひさしぶり！」

「また会いましたね……」

レティーシャ・エルト・モランと、

イリオス＝ウォーカーだった。

レティは事情を知つていいのか知らないのか、にこにこと緊迫感もない笑顔である。

一方、イリオスは無愛想な感じだった。

無理やり子守りを押し付けられたのかもしれない。

「レティー様、イリオスさん！！」

「イリオスじゃないの！？」

嬉しそうに駆け寄るメリッサに、イリオスは苦虫をかみつぶしたような顔になつていた。

彼はメリッサを、義理の母親を避けている。

「久しぶりね、本当に！… ゼンゼン会いに来ないんだもの！…」

「あなたにあいさつしたんじゃありません」

「何よ。相変わらず無愛想ね」

頬をふくらませるメリッサ。その様子は、母親といつより友達に対するもののように思えた。

幼馴染だつた頃の名残だつ。

誰のせいだと思つてる、思わずそう呟いたイリオスは、睨むような目で見る彼女に詰問にあつた。

彼女はイリオスの恋心も、父親に対する思いも、全然知らないのだった。イリオスの目がさらにきつくなる。事情を知つているアルトが、慌てて止めに入つた。

「あの、二人はどうしてここにいるんですか？」

「あ、忘れてた！！ 魔女狩りが始まつたんだよね！？」

スピカは！？ あの子はどこにいるの！？」

レティの顔がかなり真剣なものとなつた。

揺さぶられ、アルトは言葉に困つて立ち尽くす。

「何があつたの！？ ねえ、答えてよ、アルトッ！…」

「スピカはいなくなつたんです。探しているんですが、どこにもいません」

「そんなつ！？」

レティの顔がしだいに青ざめていく。

イリオスの顔も心配そうにしかめられた。

とーー。

「いたぞ、魔女だ！！」

「あれ？ でも、あいつスピカ＝ルーンじゃないよな？」

「こうなつたら魔女なら何でもいい、連れていくぞ！！」

三人の男たちがその場から現れた。レティは怯えて

後ずさり、イリオスが構えていた剣を抜く。

メリッサたちも青ざめて下がつた。

「逃げてください、母さん、アルト、レティ様！！」

「ここは俺が食い止める！！」

「で、でもイリオス！！」

メリッサが泣きそうな顔になつた。

彼は彼女の血のつながらない息子である。

置いていけるはずがなかつた。

「メリッサ早く！！ イリオスは魔導師とかじゃないから大丈夫！！ ここは逃げるよつ！！」

「イリオス！！ イリオス————！」

メリッサは両側からアルトとレティに連れて行かれた。

アルトは逃げながらも、スピカは危険な目にあつていいだろうかと心配になつていた。彼女が本気を出せば逃げ切れるだろう。

だけど、彼女は力をともに出来るかどうかが分からなかつた。

「レティ様、巻き込まれないうちに城にお帰りください。

あなたは魔女ではないんですよ！？」

「嫌！！ あたしここに残る！！ 一人だけ温かい場所でぬくぬくしてて耐えられない！！

エトワールだつて協力しててるんだよ！？」

「エトワール！？」

アルトが驚いたような顔になつた。彼が動いているなんて初耳だつた。彼は貴族であり、アルトたちの友人だが、魔導師でも何でもない。

「どうしてヒトワールが！？ 彼はビーにいるんですか！？」

「『カツサンドラ』に行つた！！」

『上い喫茶・カツサンドラ』には、今、リイ＝ゴルラッジがいた。

彼女は無事だらうか。殺されないとは彼女の発言から分かつている。

だけど、本当に手を出されないのかが心配だつた。

そして——。

「あつ……」

アルトは額を手で打つてうめき声をあげた。

不審そうに一人が走りながら見てくる。

「どうしたの、アルト！？」

「オリオンを忘れてきた！……」

オリオンのことを知らないレティは首をかしげていたが、

今にいたるまでアルトと同じように忘れていた

メリッサは、血の氣の引いた顔になつていた。

魔女狩りは魔女だけを狩るのではない。

魔導師・魔法生物・使い魔をも狩るのだ。

「オリオン、無事でいて！！」

「ごめんね、オリオン……！！」

アルトたちは店に一旦戻ることにし、

方向を変えてオリオン救出のために乗り出したのだった——。

使い魔は友と共に行動する（後書き）

エトワール、リイラ、オリオンが再登場します。次回の主人公は、珍しくリイラになります。次回もよろしくお願ひします。

友人は店を守る

リイラ＝コルラッジは男たちに睨みつけていた。だが、彼らは意に介さずにまだ居座つて搜索を続いている。すぐに帰れ、と思ったが、もう魔女も使い魔もない。

安堵しながら椅子に座つていた。

「いたぞ！！ 魔法生物だ！！」

リイラの顔から血の気が引いた。

今現在、魔女と使い魔は確かにいない。

だが、リイラはここにドーラゴンがいることを失念していた。

「オリオン逃げて！！」

悲鳴のような声を上げるリイラをあざ笑うかのように、男たちは首をかしげながら空中に浮くオリオンに銃口を向けていた。

「駄目ええええええっ！！」

響くのは銃声。リイラは体から力が抜け、へたへたと座り込んでしまった。オリオンはぴくりとも動かない。

「あああああああ！！」

悲鳴を上げるリイラには一切構わず、男たちは文句を言いながら店を出て行つた。

「殺しちまつたようだな。まあいいんじゃねえか？」

「魔女や使い魔よりは料金も安いしな」

「ちつ。それでも少しは金になつたぜ？」

「分かつたよ。次は殺さねえつて……」

リイラは叫ぶ力も立ち上がる気力も起きないまま、うつろな目でオリオンを見つめていた。

かなりの時間が経つた頃に、ようやく店に誰かがやつてきた。

「メリッサ、ちゃんと食べてるか？」

差し入れ持つて来てやつたうわああつ……

最後の叫び声は、倒れた龍の子供とリイラの姿が目に入つたからだつた。

「エト……ワール……」

エトワールは明らかに狼狽わうぱいしていた。

何を言つていいか、また、何をやつてもいいか分からぬのだろう。

「死んじやつた……この子、死んじやつたよ……」

エトワールは悲痛な声を聞き、かがみこんでオリオンに触れた。と、カツと目を見開いたドラゴンの子供が彼の手にかみついた。

「いいつてえええええつ……」

「オリオン、生きてたのね……」

「こっちの心配もしてくれよ……」

慌ててエトワールはオリオンをひとつつかみ、牙を手から放させた。

じつとりと血がにじんでいるが、

リイラはまったく気に掛けずにオリオンを抱きしめていた。

仕方なく、自分で包帯を巻いて止血している。

「……で、あんた何でここにいるんだ？」

スピカやリイラはどこにいるんだ？」

「あなた、魔女狩りのこと知らないの！？」

「魔女狩り！？俺は何も聞いていないぜ」

リイラは首をかしげながらも、何も言わずにオリオンの様子を見た。ただの拳銃だつたのが良かつたのだろう、軽傷ですんだようだつた。

聖水だつたら、こんなに小さいのだからひよつとしたら本当に死んでいたのかもしれない。

「よかつた、本当によかつた……」

オリオンは警戒するよつにエトワールに

唸り声を発していた。リイラはそれをとがめるよつに

軽く頭を叩き、お茶の準備をするために彼に背を向けた。

オリオンはさらに大きく唸り、リイラは困惑しながらも放つておく。エトワールはにっこりと笑うと、きらりと光るものを取り出し、それをリイラの背後に向けた近づけ、彼女は一切気配には気づかず、オリオンが唸る声と、リイラがかちやかちやとカップを探す音だけがその場に響くのだった——。

友人は店を守る（後書き）

最近シリアスなシーンが多くなつてきました。
ほのぼの系なのを楽しみにしていた方は
すみません。もう少ししたら

単調に戻ります。

何故カリイラを狙うエトワール。

彼の目的は！？

次回もよろしくお願ひします。

使い魔は男と遭遇する

アルト＝ハルメリアは、走っていた。隣にはメリッサ＝ウォーカーもいて、はあはあと息を切らせながらも同じように走っている。

少し休みたいと思いつつも、そんな余裕などないのが現状だった。

メリッサもアルトも文句など言わずに走るばかりだった。

とーー。

「よお、何やつてんだお前ら？」

「え、ええええエトワール！？」

二人は急停止してそのまま転びそうになり、慌てて足に力を込めてそれを阻止していた。

「な、なななななんでいるのここに！？」

「それがさー、俺も覚えてないんだよな」

何か大事なことを忘れている気がするけど

アルトは訳が分からなかつた。それは、

ここで頭を抱えているメリッサも同じであろう。

だが、良く見ると彼の目はどこか変だつた。

アルトたちを見ているのに、どこか標準が合つていない。

口調もどこか変で、明らかにおかしかつた。

アルトは気づかなかつたけれど、メリッサは彼の様子がおかしいことに気付いたようだ。

キッと睨むように彼を見つめていた。

「暗示でもかけられているのかしら。

それとも魔術？ どうやって解けばいいのかしら、困るメリッサ。 そんな彼女を助けるかのように、

再びアルトの頭にスピカの師匠の言葉が響いた。

？光の術を使い、闇の術を打ち消せ。

妹弟子にそう伝えるのじや？

「わ、分かりました！――」

アルトはそのままをメリッサに伝えた。
優しげなほのかな光が彼女の手に灯り、
エトワールにそれを近づける。

エトワールはぼうつ、としたような
目でそれを見ていたが、やがてはつと
なつたように焦点がメリッサを捕えた。

「メリッサ……？」

「エトワール！――正気に返つたのね！――

何があつたの！――？」

エトワールは頭をおさえて呻いた。

記憶が混乱しているのだろう。

しばらく彼は黙っていた。

しかし、かなりたつてから口を開いた。

「変な奴にいきなり殴られたんだ。

それから、訳が分からなくなつて……

「姫にあつたのはあなたなんですか！――？」

アルトが重ねて問い合わせる。少し

考えてエトワールは頷いた。

だんだん思い出してきたようだ。

「そうだ！！俺は魔女狩りのことを聞いて

リイラに会いに行こうとしていたんだ！――」

「思い出したのね！――じゃあ、早くリイラの

所に行かなくちゃ

？その必要はない。私が送つてやるつ。

馬鹿な弟子の責任を取るのは私の役目だが、
今は動けない。止めてくれ、あいつを……？

それ以上声は聞こえなかつた。

光が彼らを包み込み、次の瞬間には、

彼らは『占い喫茶・カツサンドラ』にいた——。

彼らが出会う少し前——。

キーンツと何かが弾き飛ばされる音がした。
きらめく刃が床に転がり、へたり込んだ
リイラは目を見開いて固まっている。

「エトワール……？」

カシャンツとカツブが落下し、割れる音が響いた。
うつうつ、と威嚇するように再びオリオンが唸る。
この竜の子供が、リイラに投げられたナイフ
から彼女を守つたのだ。

硬いところにはじかれ、それは彼女に傷
一つつけることなく落下した。

「あんた…… 教会の使者ね……！」

私は人間よ…… 傷をつけてはならない掟
を守りなさいよ……！」

「残念だが、俺は教会の使者じゃない。

その掟には値しないね」

「じゃあ、あんた誰なのよ……！」

「冥途への土産に教えてやるよ。

俺はスピカの弟子弟子、シュイアだ。

聞いて驚くなよ？ この騒ぎもすべて俺の仕業だ」

リイラはぎょっとなり、男を睨みつけながら立ち上がった。

スカートのほこりを払い、彼を問いただす。

「どういうことなの？ あんたの目的は何！？」

「スピカさ。俺に初めて黒星をつけたあの女を、
完膚無きままに叩きつぶす。それが俺の目的だよ。
教会のやつらを全部操つて行動させてやつたのさ。

あんたは知らないかもしけないけど、教会と魔女たちは組織として結託していたんだ。それを壊すのは簡単だつたぜ？」

狂つたような笑い声が響き渡る。

シュイアと名乗った男の顔は、あきらかに異常者の顔だった。スピカのためにこんなおおごとに発展させたと彼は言つ。すべての魔女や使い魔、魔法生物たちを巻き込んで。「俺のことをすべて知つたあんたに、生きる価値なんてないね。さあ、死になつ！！」

「くつ……」

男の手がリイラの細い首を締めあげる。

リイラは抵抗ができなくて青ざめるばかりだった。

「やめ……なさいよ……」こんなことして……

なんに……なるつて……」

「うるさいな、少し黙れよ

「つ……？」

シュイアはリイラの言葉を封じた。

リイラはじたばた暴れるが、さらに苦しくなるだけだった。

力が抜け、顔が白み始めたその時に、

扉を蹴破る音が聞こえた——。

使い魔は男と遭遇する（後書き）

ついに男の正体が分かります。
陰謀に巻き込まれたリイラたち。
スピカは無事でいられるのか！？
次回もよろしくお願ひします。

魔女は葛藤する

スピカ＝ルーンは走っていた。
腕には奇妙な動物を抱いている。

何かに追われているようだつた。

頬を紅潮させ、足をもつれさせながらも、
スピカは必死で逃げまとう。

動物はただ鳴くばかりだつた。

「待て、スピカ＝ルーン！！

大人しく捆まれ！！」

「待てと言われて、大人しく待つ

馬鹿がどこにいる！？」

後ろから追いかけてくる男に、

スピカはツツヨミを入れながら走つていた。

それはそうだろう。

待てと言われて待つのは、飼い犬か、
よつぽどの馬鹿である。

古今東西繰り返されて來た

かけあいをしつつも、スピカはあせつていた。

リリアという名の動物をしつかりと抱き抱えながら

彼女は必死で男との距離を開けようとしている。

とーー。

リリアが急にスピカの腕の中で暴れ始めた。

驚くスピカの前で、ぴよいんと跳ねて

抜けだしたリリアは、そのまま男の方に向かつて行つた。

「リリア、危ないっ！！ やめなさい！！」

スピカが慌ててリリアを追いかけた。

リリアはぐるぐると男の周りを回つている。

星のようなきらめきが周囲に飛び散り、

男の顔が穏やかな顔になつていく。

「あれ……？ 僕、何やつてたんだ？」

「え……？」

スピカは驚いたように目を見開いていた。

男はさつきとは様子が違く、スピカを見る目にも侮蔑やその他の悪い感情がうかがえなかつた。

再び、リリアがぴょいんと跳ねつつ

スピカの腕に收まる。

と、声が聞こえてきた。

？スピカよ、わらわの声が聞こえるか？？

「師匠！？ どこにいるのですか！！」

？落ち着くのじや。わらわは、そちの

近くにはおらん。リリアは役にたつたみたいじやな？

「この子、師匠が……」

スピカは紅い瞳に涙を浮かべた。

温かい気持ちが胸に広がつっていく。

？シュイアが動き始めた。リリアを連れ、使い魔たちのもとへ急ぐのじや？

「シュイアが？ でも、師匠！！」

私は、彼らを巻き込みたくはありません

？もう巻き込まれておるのじや。

メリッサたちは、シュイアの目的をすでに知つておる。彼らと会うのじや

「待つて！！ 師匠！！ 師匠！！」

声はどぎれで聞こえなくなつた。

スピカは青ざめた顔で座り込んでいる。

アルトたちを巻き込ませたくない

姿を消した。だけど、結局は巻き込んでしまつたのだ。

私が、彼らに会つたから。

彼らを好きになつたから。

もう会っちゃいけない。

そう思うのに、スピカの心の奥で

会いたいと深く思う気持ちが膨れ上がってきた。

エトワールに、メリッサに、リイラに、

レティに、そして、なにより、アルトに——。

会いたい。また会って話がしたい。

一人はもう嫌だった。

そんな彼女の心を見透かしたように、
ぐいぐいとリリアが口で彼女の服の袖を引いていた。

行こう、と。彼らに会いに行こう、と。

スピカは涙を袖でぬぐうと、リリアをしつかりと
抱きしめて歩き出した——。

スピカがついに彼らと
接触をはかります。

次回はアルトたちと
教会の使者の戦いです。

次回もよろしくお願ひします。

魔女は弟弟子のたぐらむを阻止する

アルトたちが部屋に駆け込んだ時、

チッと舌打ちをしたシユイアが彼女から身を離した。リイラがせき込み、慌ててエトワールが駆け寄る。

リイラは背中に手をあてられて一瞬抵抗したけれど、彼はさつきの男とは違うと思い直して大人しくなった。

アルトはキッとシユイアを睨みつけている。

メリッサは驚きを隠せない様子だった。

スピカと同じように、彼女にとつてもシユイアは弟弟子だ。

その彼が、こんなことをするなんて、と。

「あんた、何でこんなことをしているの！？人を殺そうとするなんて、師匠がどんなに悲しむと思つの！？」

「つるせえよ」

「きやあつ！－！」

「「メリッサ！－！」」

男がキッとメリッサを睨みつけると、

衝撃波が発生して彼女は吹き飛ばされた。

壁に叩きつけられ、そのまま手を伸ばした状態で気を失う。

「なんてことを！－！ あんたたち、兄弟弟子なんでしょう！－？」

リイラはメリッサを抱き上げながらシユイアを睨みつけた。しかし、彼はおかしそうに笑うばかりだ。

狂つている……。

彼女はその言葉をあえて言わなかつた。

そう考えたのは、彼女だけではないだろう。

アルトも、エトワールもそう思つてゐるのが明らかだつた。

「兄弟弟子だよ。それがどうかしたか？」

「あんたねえつ！！」

「リイラ！ 馬鹿に何を言つて無駄だよ」

なおも言ひ返そつとしたリイラに、アルトが彼にしてはきつい口調と言葉でいさめた。

「なん……だと……？」

「だつて馬鹿でしよう？ スピカを倒すためだけに、こんな大掛かりなことをやつたつて言つたよね？」

「そんなの馬鹿がやることだよ」

「てめえええええつ！！」

彼がアルトに飛びかかった。

アルトはそれを読んでいたので飛び退つてよける。

だが、アルトは彼の能力をすっかり忘れていた。

ぎろりと睨んだシユイアに反応するよつに、扉から何者かが侵入してきた。

憎むような目をした者たちがぞろぞろとやつてくる。

「あんまり俺を怒らせるんじゃねえよ」

「アルト！ 傷つけちゃ駄目よ！！」

「この人達、皆こいつに操られてるの……」

「そ、そんなこと言われても……！」

奇声をあげて手にした武器で飛びかかつてくる男を、とつぞに近くにあつた麵棒で止めるアルト。

その際に、少し回復したリイラが鋭い声を上げたので、歯を食いしばりながら手のしびれに耐えていた。このどせくわで、いつの間にかシユイアは消えていた。

「ひつなつたら、戦うしかないわよ！！」

「あまり怪我はさせないよこ、だけどね！！」

メリッサもエトワールも武器を取り始めた。

とはいっても、ケーキ屋であるので、ホイッパーも

フライパン、などしかないのだが。
包丁は危険なので使えない。

「私も、戦う！…」

リイラも箒をして戦い始めた。

操られているとはいえ、そんなに強くないらしく、
教会の使者たちは四人に押されていた。
しかし、あまり傷は付けないよう」という
制限のある戦いだ。

やりにくいことはこの上ないだろう。

「このまま、気絶させちまた方がいいんじゃないか！？」

「それがいい、わね！…」

「ごめんなさい！…」

リイラが持てるすべての力を箒に込め、

男の一人の頭を叩きつけた。

予想以上の力が入ったのか、男が気を失う。

アルトたちもそれぞの武器を使って教会の使者たちを倒す。

「早く、あいつを追わなくちゃ！…」

そのまま四人は外に出ようとしたが、さらにかなりの人数が
店に入り込んできたためにできなかつた。

「あいつ、なんてことをしてくれたのよ！…」

「こんなに、倒しきれないよ…」

「そんな…」

「皆、弱気になるな！…」

リイラたちがへたり込み始めてしまった。

手は痛いし、彼らをむやみに傷つけてはいけないから、
戦う気力はだんだんそがれていった。

エトワールが叫ぶが、彼もまた気力が

そがれているのは確かな事実である。

「ちくしょう……どうしたら……！…」

「皆、目を覚まして！…」

少女の声が響き渡つたのはそのすぐ後だつた。

奇妙な生き物を抱いた少女が店に飛び込んできたのである。その少女は、紅い目に白い髪をしていた。

彼らが探していた人、スピカ・ルーンその人である。

奇妙な生き物——、リリアがぴょんぴょんと

男たちの周囲を飛び回る。

しだいに、憎しみの顔が消え、

彼らは穏やかな顔に戻つて行つた。

「目を、覚まして！！」

さらにスピカはリリアを抱きながら祈り始める。まばゆい虹色の光が両者の体からあふれ出し、世界を包むかのような強い強いものとなつた。アルトたちは訳が分からぬと言つたような顔でそれを見守る。

世界で、異変が起きていた。

魔女を狙つていた者たちが、しだいに穏やかな顔を取り戻す。

戦つていた者たちが、動きを止める。

ディオナが、エリオスが、レティーが、

今にも泣きそうな顔になつて動きを止めていた。

温かき光が世界中にあふれていく。

いつの間にか、アルトたちの目にも涙が浮かんでいた。

こうして、スピカの弟弟子、シュイアのたくらみは、とりあえずは阻止されたのだった——。

魔女は弟弟子のたぐりむを阻止する（後書き）

ついにスピカがアルトたちと
再開します。次回は
もう一話の後、日常編に戻ります。

魔女と使い魔は一人で会話する

スピカ＝ルーンは、不安な面持ちで歩いていた。
隣には、使い魔のアルト＝ハルメリアがいる。

彼は再開を喜んでいるのか、それとも
勝手にいなくなつたことを怒つているのか、

悲しんでいるのか、まったく見えない表情をしていた。

スピカは彼というのが気まずくて仕方ない。

彼の幸せのために手を離した。

彼だけは幸せになつて欲しくて。

だけど、スピカは簡単に戻つてしまつた。

いや、實際には悩んで悩んで決めたことだけれど。

「……スピカ」

アルトが立ち止り、名前を呼ばれたスピカはびくつとなつた。
慌てて立ち止り、彼の瞳を見つめる。

紅い目と青い目がかちあつた。

スピカの体が小刻みに震える。

何を言つていいのか、また何をやつていいのかが
まったく分からなかつた。ためらう彼女に、

アルトは音もなく近づいて優しく抱きしめた。

「どうして、黙つていなくなつたりしたの？」

アルトの腕に力が籠つた。

スピカが痛くないと感じる程度の力だつたが、

それでもスピカは彼の怒りを感じ取つていた。

「あなたを、危険に巻き込みたくなかつたの。
あなたにはこれは関係のないことだつたから。

危険な目に遭うのは、私だけでいい

「僕はあなたの使い魔だよ！？」

どうして、関係ないだなんて言つの…？」

「……っ！」

アルトの手にさらに力が込められた。

今度は悲鳴をあげそうになるぐらいいの力だった。

スピカはあえて声をあげなかつた。

彼の心の痛みを感じた気がしたから。

「僕の幸せは、僕が決めます。

あなたがそばにいないと、僕の
幸せはないんです！！」

「アルト……」

「あなたがいない未来も、何もかもいらない。
一生逃げる生活だつていい、あなたとならば
どこへだつて逃げて見せる」

スピカは氣づくと泣いていた。

赤い目からとめどなく涙があふれ出す。

目をこすつても、こすつてもどんどん
あふれ出して止まらなかつた。

「一度と、僕のそばから離れないで、スピカ
アルトの目からも涙がこぼれおちていた。
彼らの涙はまるで星のようきらめきながら、
地面にしたたりおちていた。

アルトは手の力を弱め、スピカはようやく
安心したように息を吐いていた。

「スピカ、好きだよ」

「私も、アルト」

二人の唇が重なつた。

甘い口づけがスピカの白い頬を紅潮させていく。
はあつ、とどちらからともなく熱い吐息が
二人の口から漏れ出ていた。

長い長い口づけだつた。

しばらくして、スピカは恥ずかしそうに

彼から身を離そうとしたけれど、アルトはそれを許さず彼女を解放しようとした。しかつた。

「アルト、離して」

「駄目。しばらく会つていらないんだもん、これくらいは許してよね？」

「もう、充分、したのに……」

「僕はまだ充分じゃないから」

アルトはなおも彼女の唇にキスを重ね、彼女の顔はまるでトマトのように耳まで赤くなつていた。

スピカは抵抗しようとしたが使い魔になる際にかなり握力が強くなつているアルトに、同じ年の少女にも劣る力のスピカが敵う訳もない。

無理やり力で押さえ込まれてしまい、アルトが唇だけでなく耳や頬や額にまでキスをするのをこらえるしかなかつたのだつた。

珍しく楽しげな笑みを浮かべたアルトは、彼女が泣きだしてしまうまでキスを続け、スピカは一度と彼を置いていなくなつたりしないと心に誓つたのだつた——。

魔女と使い魔は一人で会話する（後書き）

あまり一人の行動に進展がなかつたので、
今回は甘甘を目指してアルトに頑張らせました。
次回からは日常編に戻ります。

魔女は使い魔と共に新たな生活をする

スピカ＝ルーン達は、住居を森の中に移して
いつもの生活を始めることにした。

リイラ＝コルラッジ、レティ、メリッサ＝ウォーカーの
エトワールの協力により、どんどん家が出来上がりしていく。
無論、スピカやメリッサは魔術を使っているのだが。

「皆、手伝ってくれてありがとう」

スピカがにっこりと笑つて言つと、エトワール達は

照れたように笑つた。

特に、アルトの顔が一番赤かった。

少し彼女の服を引くと、彼は昨日のことを小声で謝つた。

「昨日は、すみませんでした。調子に乗りすぎました」「
次からは気をつけてね」

スピカは真っ赤になつたのをこまかすために
わざと冷たい声で言つた。アルトが少ししゅんとなり、

スピカはちょっとと言い過ぎたかなとも思つたけど

フォローはしないで仕事に戻つた。

そういうしている間に、エトワールがハンマーで
指を打つなどのハブニングもあつたが、家は完成した。
前にここにあつた小屋と寸分違ひもないデザインだ。
後はここを花壇にして、鳥小屋も立てて、と相談

しているエトワール達を尻目に、スピカは安堵の息を吐き出した。

「なんとかなつたようで、よかつた」

「あり、それより、スピカはアルトとまた一緒に
暮らせるのが良かつたんじゃないの？」

「リイラ！－」

リイラがそうからかつてきたので、スピカは
怒りを爆発させて叫び、アルトがびっくりしたような

顔になつていた。

「もう、リイラとレティは帰つて！！」

……レティは、そろそろアカネが迎えに来る時間でしょう？」

「一人つきりになりたいのね、アルトと。スピカもかわいいところがあるじゃないの」

「いい加減にしないと、出入り禁止にするわよ！」「からかわれるたびにスピカの顔は真つ赤に染まり、ついには耳まで赤く染まつっていた。

レティはその意味が分からないらしくきょとんとしている。リイラはくすくす笑つていたけれど、Hトワールに村まで送つてくれるようになつてやにやと笑つていて、彼と共に帰つて行つた。

「じゃあ、私も帰るわ。ダーリンが待つてるし

アルト、スピカと仲良くね！！」

「か、からかわないでくださいよ！！」

今度はメリッサにからかわれたアルトの顔が真つ赤つかになつた。メリッサもダーリンが待つていてからと帰つてしまい、後には顔を赤くした一人だけが残された。

ちなみに、レティもアカネがちゃんと迎えに来て帰つて行つたそな。

否、まだオリオンとリリアがいた。

楽しそうに戯れている。この二匹は仲がいいようだ。

オリオンは多少の知識は得たのか、もう壁を食べたりはしなくなつていた。アルトの作った料理にほれ込んだ、というのもあるのだろう。

「じゃ、じゃあ帰ろうか、スピカ

「う、うん……」

二人はぎこちなく手をつなぎながら、オリオンとリリアに声をかけると出来たばかりの家に入った。

ちょこちょことオリオン達もついていきて家に入る。

と、そこでハプニングが発生した。

「うー、とスピカのお腹から腹の音が鳴ったのだ。慌ててスピカは手を放すと、ばたばたと振りながら「ごまかそうとしたがごまかしきれなかつた。

「……お腹減つたの？」

「……うん」

アルトはちょっと笑いながらすぐにキッチンに入つていき、メリッサやレティやリライラが新築祝いにくれた調理器具や材料をすぐに出すと料理を始めた。

しばらくして、彼がたくさんの料理を手に戻ってきた。お肉や野菜がたっぷり入ったコンソメスープ、焦げ目がほどよくついたポテトのパンケーキ、

デザートにチョコレートケーキが五個も出された。お腹がすいていたスピカは、ぱくぱくと笑顔で食べ始め、それを久しづりに見たアルトの笑顔はとても幸せそうだったといつ。

スピカの方も、久しぶりに彼のおいしい料理を食べられて幸せそうだった。

彼らの足元では、リリアとオリオンがチーズのカッ朴ケーキを一匹で分け合つて食べている。彼らはようやく戻つてきた幸せを堪能しながらお互に笑いあうのだったーー。

魔女は使い魔と共に新たな生活をする（後書き）

ようやく投稿できました。
見てくださっている方、
投稿が大幅に遅れてしません。
しばらくは日常編でのぼの
で書こうと思っています。

魔女と使い魔は日常を満喫する

スピカ＝ルーンは目覚めた時、一瞬どこにいるのかが分からなかつた。覗き込んでくるのは、使い魔のアルト＝ハルメリアの青い目だつた。

びっくりして飛び起かる。

アルトが「あ、あと頭が彼の髪を掻いたため悲鳴を上げた

לְעֵינָיו כְּלָמָדָה וְלְעֵינָיו כְּלָמָדָה

アルトはすぐに笑顔になつたが、その目には涙がたまつてたままだつた。かなり痛かつたようだ。

使って塗り薬を召喚した。

夕しふりに魔法を使つたのである種の解放感に彼女はホツとする。

「動かないでね」

いたつ
いたたたいたいつ
いたつ

「騒がないの。男の子でしょう？」

……それ、元凶のあなたに言われたくないんだけど……

モニ 言われたハビカはアハトは目をあわせテハハトハトした
ハレーヴ立キニハルバニニニニは増ルハナハハラ。

手当てが終わると、アルトは湿布をあてられた位置を

今田のハニカム、其の發明者である、松井

焼き立てふわふわのパンがたくさん、カリカリに焼いたベーコン、舌触りのいいスクランブルエッグ、ポテトサラダ、こ峰蜜芋であつた

デザートには、もちろん『占い喫茶・カツサンドラ』のケーキ

全品がずらすらと並んでいた。昨日メリッサ＝ウォーカーが

サービスだと言つておいていつたのである。

アルトのおかげで大食漢ではないものの、それなりに食べられるようになつて、スピカは黙々と食べ始めた。砂糖を入れたミルクをテーブルに置きながら、アルトは喜んで食べている彼女をほほえましそうに見ている。

「いつか、メリッサに勝てるかな……」

「アルト、何か言つた？」

「えつ！？ う、ううん何でもないよ」

一瞬悲しげな顔をしたのをめざとくスピカに見つけられたアルトは、

「ごまかすためにスピカにミルクを差し出した。

いぶかしそうな目で見てくるけれど、アルトは食堂を出て行った。洗濯や掃除はまだしなくてもいいので、そう言つて逃げることもできなかつたのである。仕方なく、アルトはリリアとオリオンに食事を出すことにした。自分の食事は後だ。

子供っぽい嫉妬を彼女に知られたくないのだった。彼女はそれを聞いたら赤くなつて、それから笑うだらう。でも、朝から笑われているのにこれ以上笑われたくないかった。ともかくも、アルトはようやく戻ってきた日常に喜びを感じていた。今日からはスピカ達と一緒にまた過ごせるのだ。騒がしくも楽しい毎日が待つているのだ。

その時だった。

『おつはようひづりづりづり……』

「うわあつ！？」

昨日別れたばかりだというのに、仲間達が集結していたのだ。レティカエトワールに連れてこられたらしい人物がそっぽ向いていたけれど。（ちょっとは遠慮してほしいんだけど……）

アルトは思わずそう思つてしまつたが、口には出さなかつた。言つても無駄だからである。

彼らが今更従うとも思えなかつた。

「……すみませでしたね。彼らが無理に押しかけて」
イリアスがため息交じりに言つた。

氣を使つてゐるのは彼だけのようだ。

エトワールは氣づいていても氣を使わなそつだが。

「皆、いらっしゃい」

スピカが走り出てきたので、アルトは彼らに
帰つてもらうことができなかつたといつ。

今日もスピカはリイラにもらつた星の髪飾りを
つけてゐる。いつか、彼女に自分も髪飾りを
プレゼントしたらつけてくれるかな、とアルトは思つた。
騒がしい事この上ないけれど、今はそれでもいいかと思つ。
スピカも、リイラも、エトワールも、メリッサも。
イリアスさえもいるこの空間が、騒がしい日常が
よつやく帰つて來たのだから。

魔女と使い魔は日常を満喫する（後書き）

一ヶ月も投稿してなくてすみません。
ネタを探しまくつて少しずつ書いていました。
これから予定は、日常編を数話書いたら
また少しシリアスを入れる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7402/>

魔女と使い魔のバタバタな日々

2011年9月5日17時22分発行